ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと〝風〟

第154号（２０１９年３月）

風に吹かれて（131）

白井啓治

・ようように梅の咲いて今朝は真夏の霞の垂れて

タレントの堀ちえみさんが舌癌というニュースが流れた。それを見ると小生の上顎洞癌の発見から診断の経緯と全く同じ進行であった。小生もそうであるが、初診から上顎洞癌特定と治療方針の確定までほぼ二十日。それで既にステージ４。これで、もし一か月前に診断を受けず、今頃まで放置し、我慢しきれずに診察を受けていたら、おそらくは余命診断となったのかも知れない。

幸いなことに、今回の放射線照射と抗がん剤治療による、命のリスクはほとんどないと言われた。殆どだからリスク０というわけではないが、担当医からリスクはほぼありません、と聞かされて妻は大いなる安堵をしたに違いない。

癌の診断が下されると、殆どの人が死を意識するものらしいが、癌という奴の生存確率が、現代にいたっても未だ低いことを物語っている現実的恐怖ということなのだろう。

脳に近接した上顎洞癌と診断されたとき、小生の頭の中には生き死にへの執着的感覚は全くなく、肉体的苦痛だけは勘弁願いたいと思った。正直言って、小生には死を恐怖する感覚は０と言っていい。死という未知の領域への恐怖よりも未体験ゾーンへの物見遊山の好奇心の方が強いと言える。

このことはどうも小生の幼児期からの体験が一つのベースになっているようである。牧師と医者の肩書を持つ父は、焼け出された大阪から母方の北海道へ疎開したのであったが、敗戦が決まったような時に、わざわざ大阪になんか戻るな、と祖父に言われ、祖父の用意した炭鉱医として勤めることになった。

抗口の近くに建てられた診療所と隣接した住まいには、連日連夜の様に落盤事故で大けがを負った炭鉱夫たちが担ぎ込まれてきて彼らの大声に叫ぶ苦痛の声が住まいのどこにいても聞こえてきた。いわば医者と坊主の同居している我が家には、人の死が日常化しており、人間の死ぬことへの恐怖とか怖れがあまり育まれず、「人は生まれ、堕ちる」を当然の事実として受け入れ、そこに妙な感傷の支配する余地がなかったのかも知れない。

そんなわけで、上顎洞癌ステージ４と医師から診断を受けても狼狽えたり恐怖するものは何も湧いてこなかったのである。あまり淡々と診断の結果を聞く小生を不思議に思ったのか、担当医は、小生の職業を聞いてきた。脚本業だと答えると、それでステージ４の癌と聞いても動揺することもなく、細かく質問なされるのですね、と言われたが、脚本家だからと言って、己の生き死にに右往左往しないということはない。むしろ形振り構わず慌てふためく方が物創り業の姿だろうと思う。

医師への質問の多くは、我が肉体の受けるであろう苦痛に関することばかりであった。小生、己の肉体の苦痛だけには臆病すぎるほどに臆病なのである。小生にとっては、生き死によりも肉体的苦痛の有無が大いなる問題なのである。

医師からは、治療に関する副作用のことは十分すぎるほど説明を受け、今では放射線照射も抗がん剤投与もその副作用は、以前とは比べ物にならないほど軽くなってきているとの事であった。

ならば積極的に治療に取り組もうと決心したまでは良かったのであるが、現実に襲われた抗がん剤の副作用は尋常な苦しみではなかった。これならば、死ぬほどの苦しみを味逢うことになりますが死ぬことはありません、と聞かされていた方がましであった。

医師も看護師も言う。白井さんは、特別に過敏症なんですね、と。しかも小生が、饐え切った胃酸のげぼげぼしている中に灼熱の焼け火箸を突っ込み掻き混ぜているようだ、と説明すると、作家の言う苦痛の表現は流石に違うと来たものだ。頼むからそんなことに感心しないでほしいものだ。

苦痛も生きている時の敗闕。これも風流と感じることが出来ないのならば物書き廃業である。本意ではないが乗ってしまった船だ。痩せ我慢に痩せ我慢を重ね「敗闕も正に風流なり」を声高に叫ばねば。

それにしても菅原兄は、この苦痛を三度も乗り越えてこられたと思うと、只々脱帽である。

21世紀の課題

菅原茂美

そもそも「世紀」とはなんぞや？
紀元から起算した年数を言う。
そして、「キリスト」とは個人の名前(固有名詞)ではなく、ヘブライ語の、将来「王」になる人に、油を注がれた人をいう。それにイエスという個人の名をつけて、イエス・キリストという固有名詞となる。
キリスト教で、キリスト(救世主)とみなされ、イエス・キリストが生まれたとされる翌年を、「紀元元年」とした紀年法である。
ラテン語ではアンノ・ドミニの略でＡＤが使われ、キリスト紀元ともいわれ、世界で最も広く使われている。しかし、キリスト教以外も含め「共通紀元」としてＡＤを「ＢＣ」ともいわれている。日本ではキリストの生まれた前と考え、ＢＣ（＝紀元前 Before Christ）とされている。そうはいっても西欧でＡＤが一般的になったのは、15世紀であり、それまでは各国、まちまち。

＊

さて首題の件だが　20世紀の次は当然、21世紀がやってきた…　では、チコちゃんに叱られる。イエス・キリスト以来２０００年も経つのに、何か大きな変革が有ったろうか？　私などむしろ大きな変革を望むわけではない。むしろゆっくりした経過を期待するほうである。
世の中で一番いけない事は不平等。何故ならそこから不満が爆発して争いが発生するから。誰にも平等で、争いがなければこれに勝る平和はない。その為には、やはり民主主義で自由が通用する世の中を構築する事であろう。しかし自由主義を自分勝手主義と、勘違いしては絶対にいけない。誰かが自由になれば、誰かが不自由では永遠に真の自由主義は訪れない。亭主関白で奥さんが陰で泣いているようでは、自由主義とは言えない。私など思うには、何もずば抜けて豊かでなくとも結構。普通であればそれで十分。豊かな暮らしは地球環境を荒らすのみで、末永い安定を示すものでは決してない。

＊

さて社会の安定のためには、まずもって人口密度が重大な問題である。人口の減少が問題化しているが、我が国は国土面積は世界の０，０３％なのに、人口が１・６％であるから、なにかと問題が起きてくる。日本の人口密度は世界第25位で１平方㌔あたり３３５人である。世界の平均から見れば53倍も密度が濃い。せめて半分ぐらいにできないか。ミミッチイ競争は人口過剰からきている。人口削減等とんでもない提案と叱られるだろうが、諸悪の根源は人口過剰。地球の人口収容能力は、50億人だが現在すでに７５億人に達している。世界のもめ事の起源はここにあると思われる。
日本を眺めれば火山列島。活火山が１１１座もある。活火山の隙間に、都市が割り込んで建設されているようなもので、山裾近く迄人家が建込む。これでは常にガケ崩れの恐怖に曝されている様なもの。
更なる恐怖は狭いところに木造建築が立ち並ぶことである。後藤新平の昭和道路は我が国では稀に見る例外中の例外。類消防止のための広い道路は夢のまた夢。ならばそれ相当の不燃側壁とか屋根瓦とか、大規模ビルとの混在とか工夫を凝らしての対策が考えられるのではなかろうかと思う。できる限りの知恵を絞って大規模類焼は防ぎたいもの。
これら諸々の点、茨城県は平地率が日本一で、実に安定である。となれば早いところ国主導で県境を越えて平均化するよう、道州制でも導入してガケ崩れ災害・類焼防止などいくらでも工夫ができると思う。
笠さした歩行者が車とすれ違えないような細い道も何とかしなければ、成熟した民主社会とは言えない。農地法の改正などで、もっとゆとりある道路行政を行い、地方生活をエンジョイしたいものである。

＊

世界に目を転じれば、あまりにも争いが多すぎる。21世紀に世界がまず取り上げなければならない問題は、戦争及びその準備の防止である。政府とは別に軍人は、とにかく戦争をやりたくてしようがない。うずうずしている。軍人は職務を全うするためには、実際に戦争をして勝利する事だろう。双方でそう思っていたら、必ずいつかどこかで些細な事件が戦争勃発に発展するに違いない。
歴史問題を持ち出し、百年近い問題を掘り起こし、まるで揺すり・たかりの恐喝さながら。こんな近隣関係では平和はやってこない。世界はいかなる国家も軍隊は持たない。日本の憲法を、見習うべきだ。軍隊は国連だけが持つ。何事かあれば国連軍が鎮圧に向かう。そして国連の議決権は、出資額に関係なく一国一票。軍事費出資額は例えば各国ＧＤＰの１％以下。こうすれば大国のわがままは許されない。多分すぐ脱退とかいうであろうが、各国はその国の生産品は一切購入しないなどで対抗し世界の秩序を守る。
21世紀だ。それ位の進歩があってもよさそうなものだ。将来、子孫からよくぞ21世紀の先輩達はその事に気が付いてくれた…と言われるよう、し

っかり気を引き締めて未来を築いていきたいものである。　現実に発展途上国などの人口過剰問題を、いかにして平均化するかそれが問題だ。教育の普及や衛生費の援助、産業の定着化、国連の事業活動を定着化するなど、何か手はありそうなものだ。世界の富の均一化。ある一定額以上の富のあった会社などは、その何割かは必ず発展途上国に寄付を義務付ける。　国連主導の試行錯誤だ。とにかくやってみる事だ。寄付した会社の納税を低減化するなど方法はいくらでもあるだろう。富の再配分しか道はないと思う。

＊

そもそも貧富の格差は、１万年ほど前、メソポタミヤで、狩猟採集の遊走生活から、農耕牧畜の定住生活が始まった時点に遡る。定住生活が始まると、汗水流して働く者と、号令をかけ、経営を管理する監督官のような者に、仕事が分かれていったに相違ない。ついには号令をかける者が権力を握り、汗水流して働く者との間に自然と格差ができていった。

いかにしてその格差を取り払うか。日本の縄文時代は、ほとんど農耕牧畜は行われなかった。定住しつつ遊走生活を行ったために、雇用・被雇用の関係は生まれなかった。ここにメソポタミアとは異なる社会構成が行われるようになった。日本では農耕が行われるのは、弥生時代からである。そして牧畜は仏教との関係もあり遥か後の時代である。

私は獣医師でありながら、いくら栄養改善のためとはいえ、牛や豚を無制限繁殖・その肉を何の反省の色もなく食いつぶす西洋式の食肉栄養主義に大いに心を痛めている。

この世に授かった尊い命を、タダ人に食われるために、むざむざ捨てざるを得ない現実を心から悲しむ。牛は殺されるとき大きな涙を流す。豚は目をむいて反抗心を明らかに示す。人類とはどうしてこんなに獰猛な動物に進化したのか？　これも21世紀に残された大きな課題であろうと思われる。ならば魚は構わないのか？　昆虫はどうでもよいのか？　所詮生物の生存競争の一幕なのであるが、植物には心がないのか。生きるためには何かを犠牲にしなければ、自分の種の保存が全うできない。どこかで区切りをつけ、納得するほかないのか？　歴史的に仏教の影響を受けた日本は、「獣魂碑」などを建立、年に一度反省の日を設けているが西欧ではどうなっているのか。いずれにしても「供養」の心が無かったら、あまりにも動物たちが可愛そうである。

その点、宗教と教育は別物ではあるが、学校教育でしっかり動物に対する心がけを学んでおく方が個人の生長のためにもプラスとなるに違いない。５代将軍徳川綱吉は犬公方とあだ名されたが、動物が勝手気ままな人間の言動の犠牲になってるのを見れば、決して軽蔑に価する存在ではなかったと考える。ペットには動物愛護法があるが、大動物にはそれに相当する法律はない。インドの「ノラウシ」も困った問題であるが、街の衛生を守る立場からも、宗教上のこれら問題も21世紀が取り上げるべき重大問題である。

＊

◎21世紀に解決すべき重大問題：

それは狂犬病対策である。人畜共通感染症は多々あるが、最も恐ろしいのは狂犬病対策である。確かに対策は複雑であり、いまだに先進・後進双方にあって、決して手をこまねいてみているわけではないが、やればできる事を手抜きしているからいまだに解決できずに世界が苦しんでいる。

狂犬病清浄国は、日本・オーストラリア・ニュージーランド・イギリス・ノルウエー、フィンランドなど１１か国。島国が多い。日本は昭和50年代に人畜共に狂犬病発生ゼロ。

汚染国は１７９か国地域。アメリカ・カナダ・フランス・ドイツ・イタリア・デンマークなど強力な先進国で汚染国は非常に多い。その理由として陸続きは、コーモリ・ネズミ・イヌ・ネコ・イタチ・アライグマなど、対処しきれないほど媒介動物種が多く、お手上げの状態である。又厄介なのは中国・ロシアなど、国内に感染は認めているものの、いつどこにどれだけという、はっきりした数字は発表していない。しかも私自身が北海道で、密輸漁船と思われる船から、日本では見慣れない犬種が上陸するのを、はっきり見届けた。もし当犬が狂犬病の潜伏感染中だとしたら、たちまち北海道に狂犬病が流行という事になる。これは恐るべきことである。

私は学生時代、狂犬病発症中の人や家畜が、狂乱状態で骨折を繰り返し、壁や木戸に角や骨をブチあて骨折して流血し、狂気の状態の映画を見せられた経験がある。人間の狂気の沙汰は一口では表現できない凄まじい状態であった。強力な力で壁などに体当たりし骨折する状況は只事ではなかった。

現在狂犬病の予防注射を受けていれば、例え狂犬にかまれたにしても、すぐ予防注射を繰り返せば生還できるらしい。海外渡航する人の狂犬病予防注射率は１％未満らしいが、海外で狂犬に咬まれ、帰国後狂犬病発症する人は毎年のように存在し死亡している。

＊

現在日本の犬の狂犬病予防注射率は、まず登録が60％。登録犬の内、予防注射を受けている割合は60％。従って日本全国の犬の狂犬病予防注射を受けている割合は36％という事になる。こんなに低い予防率ではいざ日本が汚染でもしようものなら、到底蔓延は防げない。最低でも感染を防ぐには、予防注射率80％必要と考えている。予防注射は法律で義務化しており、違反すれば罰金20万円である。安心してペット生活を送るためにも、義務化されている予防注射は必ず受けてください。日本は法治国家である。法律を守れない人は犬を飼う資格がない。

私が驚いたのは、あるネット解説者は、日本で狂犬病の予防注射を義務化しているのは、獣医師の金もうけのためであるとはっきり言っている。伝染病というものは、はやってきてから予防注射では全く間に合わない。予防注射で免疫ができるまでには最速でも3週間かかる。転ばぬ先の杖。世界中狂犬病の危険性に満ち満ちているのに、予防注射は獣医師の金もうけのためであるなどという非常識の言葉がこの世にあろうとは到底思われなかった。ネット社会には、公共性がある。未熟な高校生なども読んでいる。経営者は万端配慮の上、社会秩序を守るため、解説者を選ぶべきである。世界から嗤われないためにも…。

＊

21世紀に我々が是非成し遂げるべき重大事項は多数あるが、安定して子孫を永続させるため、是非なさねばならない事は熱帯病の克服である。人類の浅智慧が生み出した地球温暖化は、現在熱帯にほぼ限定しているマラリア・黄熱病・デング熱・アメーバ赤痢・睡眠病等、ほぼ風土病的に存在する細菌・ウイルス・原虫などによる熱帯病は、温暖化が進めば、媒介する吸血昆虫などが越冬可能となり、生存範囲を拡大化しつつある。これを克服しない事には、人口の多い中緯度地帯にまで進出したら大変。マラリアによる被害は現在世界で毎年5億人が感染し、１００万人が死亡している。21世紀がしっかりしないと悔いを後に残す。

黄熱病は研究中に野口英世博士が感染死亡している。アメーバ赤痢は私も熱帯滞在中感染を受け、3日で体重が7kgも減少した。幸い現地の医師が一発でアメーバ赤痢と見抜き、適切対応してくれて命が助かった。慣れた医師が、いかに重要かがすぐわかる。

伝染病対策もさるものながら、なんといっても重大課題である「核兵器」の存在そのものが問題である。オバマ前米国大統領の呼びかけで、今、世界は核兵器の削減に全力を注いでいる。米露英仏など主要国が、一斉にその減数に取り組んでいるのに、中国だけが、逆に増数に励んでいる。18年現在、世界の核保有数は、１４，４６５発である。核兵器、一体何のためにそんな危険なオモチャが蔓延るのか？大量破壊兵器。一発で何十万人も人を殺す。そんな危険なものを人類は血道をあげて生産に余念がない。出来損ないだ。霊長類最低のクズだ。なぜそのように狂いだしたのか？チンパンジーと人類だけが仲間同士殺し合いをする。オランウータン・ゴリラ・ボノボは、仲間同士殺し合いはしない。ゴリラは、紳士中の紳士。極めて温厚な動物である。人類はゴリラに学ぶべきことが多数ある。万物の霊長など、自惚れはヤメにして、もっと冷静に紳士道を歩むべきである。

地域に眠る埋もれた歴史（48）　木村　進

【石岡市内の社寺紹介】

旧石岡市街地には多くの寺や神社がある。これまでに佐志能神社、総社宮、青屋神社などを紹介してきたが、残りの社寺を何回かに別けて紹介します。

○ 照光寺（しょうこうじ）浄土宗

照光寺は、駅方面から市民会館へ続く細い道（神社通り、土橋通り）の右側にある。少し奥に入っており、鬱蒼とした大木に抱かれて静かな佇まいである。

浄土宗照光寺は江戸時代ここ府中を納めた府中藩主松平播磨守代々の墓がある。照光寺は常陸大掾高幹(第14代）を開祖とし、良善上人を開山として、応安7年（1374 年）に鹿の子の地に創建されたと伝えられる。約２００年後、大掾氏が佐竹義宣（よしのり）に滅ぼされた時（十二世良夢上人の時代）、寺は兵火にあって焼失した。その後、佐竹義宣の叔父左衛門尉が円通寺より称往上人を十三世として招き寺の再興をはかり、鹿の子よりこの地に移した。この府中の敷地はもと府中六名家の一つ香丸氏の屋敷跡といわれている。さて、現在の寺紋は松平家の三つ葉葵が使われている。これは府中藩松平家の家紋（表紋）であるが、

だが、この墓については、常陸府中松平家の上屋敷は江戸小石川（播磨屋敷）にあり、代々播磨守を世襲し、十代頼策のとき明治維新を迎えた。

そのため、歴代藩主の墓地は小石川宗慶寺にあったが、この小石川の屋敷跡はなくなり、大正15年にこ

の照光寺に移されたものである。

上：松平家の墓所の家紋
（八角形の中に三つ葉葵）

上：九曜星紋

いつからこの三つ葉葵がこの寺の紋と成ったかは不明だが、以前は平氏の氏族の紋の一つである九曜星であったという。桓武平氏の紋もたくさんあり、この九曜星は平将門が用いたとも言われており、千葉氏などの妙見信仰との関係も指摘されている。太陽に、火星、水星、木星、金星、土星、月の「七曜」に計都、羅ごうの2星を加えたものといわれている。

〈 照光寺と天狗党 〉

天狗党は筑波山で決起する前には、ここ府中で水戸藩攘夷派の中心となって活躍した藤田小四郎らを中心に最初は60名ほどが集まっていたが、しだいに数が増えていったという。新地（鈴の宮神社横）の妓楼に幹部らは泊まっていたといわれているが、その他多くの人達は周りの寺院などで寝泊りした。ここ照光寺にも、かなりの筑波勢が集まっていたといわれる。その者達は筑波山に結集する前に、はやる気持を寺の柱に刀で切りつけたとされる刀傷が以前の寺の2本の柱に残されていたが、照光寺が解体され、その柱の一本が、石岡市民族資料館（現ふるさと歴史館）に寄贈され、もう一本は、照光寺の本堂を新築する際にそれまであった本堂（260年ほど前の建立）と共に、大洗にある親鸞の孫・如信開祖の寺「願入寺」に移された。

願入寺（大洗）の開基堂
（寺宝の展示場）
（照光寺の旧本堂）

○ 東耀寺　天台宗（別格本山）

東耀寺は照光寺の隣にある。高照山養願東耀寺という。創建は養老5年（721）で、法相宗であったが、真言宗となり幾度か変遷して寛永17年（1640）に天台宗となった。

この寺には幕末に暗殺された伊東甲子太郎の弟で新選組の鈴木・三樹三郎（すずき みきさぶろう）の墓があることで知られている。ただ、墓には看板などはない。鈴木 三樹三郎は新選組九番隊の隊長であり、府中の隣の藩「志筑藩」の出身である。新選組時代は三木三郎と名乗っていた。慶応元年に九番隊の隊長となったが、慶応3年新選組より分離し、翌年鳥羽・伏見の戦いでは薩摩藩の指揮下に入った。幕府追討の先陣を切って東征軍の先鋒隊として、相良総三らと「赤報隊」（赤心を持って国恩に報いる）を結成し、2番隊長となった。しかし、赤報隊は新政府の許可を得て「年貢半減」を宣伝しながら信州へ進み民衆の支持を得たが、新政府は偽官軍の汚名を着せ、1番隊の相良は諏訪郊外で処刑された。2番隊は新政府に従ったため、一時投獄され、のちに徴兵七番隊に編入された。3番隊は略奪が多く、多くの隊士が処刑された。相良は後に名誉回復が図られた。

昭和53年11月
天台宗別格本山となった。

○ 愛宕神社（木之地）

石岡市民会館へ向かう通り、右側に照光寺があるところの一つ手前を左手に曲がる。そこが旧木之地町である。少し進むと右手に愛宕神社の鳥居が見える。神社の裏手へ回り少し先には昔あった「上池」跡である広場にでる。この神社に伝わる「木之地のみろく」は江戸時代に祭礼で記録が残っていた5～6体の人形であるが、いつしかなくなっていた。これを石岡のおまつりで一時復活させたという。この神社は名前の通り、元々は現在の幸町にあった古墳（愛宕山）の上にあり、そこから移されたものだと伝えら

れている。
祭神は迦具土命で、多くの神々を生んだ伊邪那岐命（いざなぎのみこと）・伊邪那美命（いざなみのみこと）が最後に生んだ火の神である。
創建時代は不詳で、近世には旧暦７月２日に愛宕の祭礼がかなり盛大におこなわれていた。風流物は、「子供踊」「ほうさい念仏踊」「富田のササラ」「木之地のみろく」「土橋の大獅子」などであり、また古記録によると、享保～天明年間(1716～1788)に町内を神輿が巡幸していたとされ、水戸天狗党の諜将薄井龍之（たつゆき）が境内で私塾をひらいていたという。

（木之地のみろく）

「みろく」とは、弥勒菩薩である。元禄15年(1702)に作られたといわれる木之地のみろくが、どのような姿をしたものかは明らかではない。江戸時代の祭事を記録した文書には祭礼の出し物として出されていたという。祭礼参加の記録では、嘉永４年(1851)が最後と思われていたが、地元の人が復活を願い、それから83年後の昭和９年に竹原の弥勒を参考にして総社宮の祭礼（年番守木町）に出し物として復活させた。それは、愛宕神社に古い一、二体の人形があり、破損を修理して数体の人形を作り、また数体を竹原より借りて、祭りに出したという。しかし木之地町は所帯が小さく昭和12年を最後に祭りの年番より脱退した。何とか「木之地のみろく」を復活させようと平成16年に祭礼に合わせて木之地町の会所にみろく人形を飾った。
「爺」（前口上）「若侍」（受口上）「姫」（舞）で口上と笛や太鼓で踊りがついたという。

平成16年に石岡のおまつりで会所に飾られたみろく人形（復元）

大野のみろく・・・青（鹿島様）、赤（香取様）、黄（春日様）
元町のみろく・・・赤（鹿島様）、白（住吉様）、青（春日様）
竹原のみろく・・・青・黄・赤・白・黒の男人形に、白の女人形　とのこと。
この「みろく」人形は県内に６か所しか残されていないという。今後検証して残してほしい。

我が労音史（５）

木下明男

20代に参加した労音運動は、１９７０年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

１９７４年の社会情勢と音楽状況

第二次田中内閣が総辞職をして三木内閣が成立し、自民党は「靖国神社法」を衆議院で自民党だけで強行採決し成立させる。参議院選挙ではタレント候補が大量に立候補し、自民党が４割を割り込んだ。京都の府知事選挙では蜷川革新知事が７選を果たした。この年の春闘は共闘委員会が中心になり、戦後最大規模のゼネストを決行して、国鉄（今のＪＲ）が初めて全面運休し、争議全体では81単産６００万人が参加し労働条件の底上げを図った。一方、極左暴力集団の内ゲバが多発、そして丸の内（東京）三菱重工ビルの爆破事件（時限爆弾）では一般の人たちが巻き込まれ、多数の死傷者が出た。これは東アジア反日武装戦線が「狼」の名で犯行声明が出され、極左暴力集団を泳がせている警察権力に対しての批判が広がった。

原子力船「むつ」が放射能漏れの事故を起こし、母港（むつ市大湊港）に帰港しようとしたが、漁民と民主団体の強い抗議行動で接岸できずに海上漂流が続いた。全国サリドマイド事件の原告団と国・大日本製薬が11年ぶりに和解。フィリピンのルパング島で小野田元陸軍少尉が発見され、30年振りに救出され帰国した。ニクソン米大統領がウオーターゲート事件で辞任に追い込まれ、またラロック米海軍退役将官が日本への、核持ち込みを

証言して日米両国政府の嘘を暴露し大問題となった。

入場税撤廃を目指して「舞台入場税撤廃対策連絡会議（入対連）」が結成される。アジア作曲家連盟が主催する「アジア作曲家会議」が京都で開催、韓国の世界的な作曲家・尹伊桑（ユン・イサン）の作品を聴く会（東響演奏）が開かれる。清瀬保二が「無伴奏バイオリンのための二つの楽章」を発表、森下洋子がパロナ国際バレェコンクールで第一位に入賞した。

オボーリン（ピアノ＝ソ連）・オイストラフ（バイオリン＝ソ連）・エリントン（ピアノ＝米国）・大橋国一（バリトン）・渡鏡子（作曲家）の各氏が逝去。

１９７４年の労音の動き

第22回東京労音総会が、４４４名の参加で労音会館で開催された。この総会では、３ヶ年計画（'72～'74年）の第２年度を総括「前年の５～６、10～11月、此の年の３～４月を拡大月間に設定し活動の総括をした。この中から生まれた多くの教訓生かすことにより、拡大運動の系統的追及が可能になり、'60年代からの停滞と後退から前進への道筋が生まれた。」として、計画の最終年度目標（会員３万名の達成）を目指す総合活動方針を決定した。それは、「立川市市民会館開設の条件を生かし、三多摩地域労音運動を強化し、例会企画では海外演奏家（団）を多く取り上げ拡大する。オペラ「フィデリオ」やベートーベンの第九で合唱参加者を拡大する」などです。その結果、会員数では昨年度平均会員数15000名を上回り、後半期には20000名に定着する事が出来た。サークル数でも３００サークル増で、組織的基礎を広げた。主因としては、ジャンルに関わらず知名度の高い海外演奏家（団）を取り上げ、職場・地域の音楽要求に応えたことが大きな力になった。総会では、「労音運動の基本任務」の改訂に伴い、規約の改訂が自動的に行われる。これまでの規約改定は、①1953年の創立総会で決まった三大スローガンを基礎とした規約草案。②1961年に全国会議で採択された「基本任務」が1964年の総会で規約に入れた２回です。

クラシック例会では、大型の海外演奏家（団）を数多く実現し、会員の音楽要求に応えた。（モスクワ音楽劇場バレェ・赤軍合唱団・チェコフィル・キエフバレェ・モスクワ放送交響楽団）。また、10月の歌劇「フィデリオ」12月の「ベートーベンの第九交響曲」は、会員参加による大合唱運動が大きな力になり、内容と評価そして組織、全ての面で成功を収める事が出来た。

ポピュラー例会では、演歌・歌謡曲等で北島三郎・藤圭子・クールファイブを初めて実現。小柳ルミ子・ザピーナツ・倍賞千恵子＆上条恒彦・菅原洋一の各例会では新しい内容の企画構成。前田憲男・森田公一・猪股猛の各リサイタルでは、新鮮で充実した企画で大きな評価と話題を広げた。労音会館を利用して、ジャンルに関わらず無名の新人演奏家育成に協力「新人アーチスト例会シリーズ」を発足。このシリーズに登場した歌手・演奏家には、その後活躍する歌手が多くいた。（グループ「さだまさし」・荒井由実・中島みゆき・八神純子・ダカーポ・藤原義章など）

地域例会、都心の例会場まで行けない人たちを、近くの会場で気軽に参加できる例会の取り組みが計画され好評を博した。東京南部の大田・品川や東部の墨田等の地域で取り組まれた。この年には、赤い鳥・横井久美子・高橋竹山・柳家小三治等が取り組まれ、地域の中に地域文化団体との連帯を広げ、新しい労音サークルの輪を広げた。

伝統音楽例会では、能「藤戸」「清経」と狂言／文楽協会／岡本文弥（新内）／竹本朝重（義太夫）／一龍齋貞水（講談）／土佐孝蔵（民謡）／宮田耕八郎（尺八）／落語（円生・正蔵・志ん朝・米朝など）／日本音楽集団／前進座「歌舞伎助六」など、古典芸能から現代邦楽に至るまでの各界の第一人者を幅広く取り上げ、格調豊かな内容で感銘のある例会になった。

例会外の活動では、１月に「新春の集い」150名、２月にスキー友好祭（上越国際）1500名、７月に夏の友好祭（山中湖）980名が開催され、サークル地域の友好が深められた。

第19回全国労音連絡会議は、11月24日25日に京都府立勤労会館ホールで開かれ、新しい「労音運動の基本任務」を採択し、その年の方針と計画を決定した。新しい「基本任務」は、旧「基本任務」の中に含まれている、労音運動の目的や性格についての曖昧な規定を改め、本来の目的と性格を明確にし「良い音楽を安く多くの人びとに」を基本スローガンに、音楽を愛好する広範な人々の要求を組織し、良い音楽を普及することを目的とした、大衆的で民主的な鑑賞運動であることを明らかにした。旧基本任務の内容と新基本任務の内容を併記し、改訂提案理由を紹介する。

旧基本任務

「労音運動は、日本民族の進歩的音楽運動の伝統を受け継ぎ発展させ、海外諸民族の民主的文化遺産に学び、芸術家、知識人並びに進歩的諸勢力と協力して自分自身の成長と社会の進歩に役立つ音

楽文化を創造することを目的としている。また、そのことによって勤労者の人間性を高め、その連帯性を強化する運動である。

労音運動は、勤労者の立場に立つ民主的な音楽運動である。その組織原則はサークルの活動を基礎にした民主的な運営である。鑑賞を中心にした音楽運動であるから、例会は労音運動の最も重要な環であり、例会内容を通じて勤労者の人間的な成長を進める。そのためには日本の勤労者の文化運動の一環として労音運動その他の民主運動との結合を強め、労音運動の発展を妨げる政治的社会的障害とたたかう。」

新基本任務

「労音運動は、「良い音楽を安く、多くの人びとに！」の基本スローガンのもとに、音楽を愛好する広範な人びとの要求を組織し、良い音楽を普及することを目的とした大衆的で、民主的な鑑賞運動です。

労音は、音楽を愛好する人なら、誰でもが個人として参加できます。

職場、農村、地域、学園などで、広範な国民各層のあいだにサークルを組織して運動の組織的基礎とし、運営は会員の意向を重視して民主的に行われます。

会員は、情操と教養をゆたかにするような過去と現在にわたる内外の音楽鑑賞を通じて、相互に人間的な成長を目指します。

労音は、目的を達成するために、多くの専門家と協力し、また他の進歩的、民主的諸運動と連帯します。」

改訂提案理由

1949年、大阪で生まれた労音運動は、1974年に25周年を迎える！

労音運動の出発は、勤労者を中心とした多くの人々の〝良い音楽を安く、より多くの人びとに〟という切実な要求に応える者だった。大阪に始まったこの運動は、その後関西から東京に広がり、更に全国各道府県に広がって全国的な運動となり、専門家の協力を得て、会員の要求する音楽の普及をはじめ、多面的な活動を展開してきた。そして1965年には190労音64万人となり、文化の頽廃化、反動化が強まる中で大衆的な文化運動の発展に積極的な貢献をしてきた。このような労音の発展の中で、勤労者の民主的、自覚的な目覚めを弾圧する目的で、1962年に音協（日経連が指導）が全国的に組織化、1963年には民音（創価学会が指導）が発足。「恐るべき労音」の出版や反共攻撃と一体となって労音サークルへの中傷、攻撃などが強化された。更に高度経済成長は、テレビの普及・レコード・ステレオ・ピアノなどの音楽産業の急テンポな発達をも垂らし、音楽状況や人びとの音楽要求も急激に変化し多様化している。外的な圧迫や状況の変化に十分な対処が出来ない労音の弱点によって、1965年の64万人を頂点に減少する会員数。特に大都市労音の減少が激しくその傾向が地方にも広がり、活動している労音は155／組織会員数は20万人になっている。全国組織として、1967年に第一次二ヶ年計画、1969年に第二次二ヶ年計画、1971年には「25周年を迎える三ヶ年計画」を立て、内部の矛盾克服に向けて討議を深め、減少傾向の克服に向け成果を上げている労音も出始めた。

1、　全国労音では減少の原因についての討論の中から、旧基本任務に含まれていた「労音の目的や性格」についての曖昧さに起因していることに気づいた。この点を正して労音運動の初心である「良い音楽を安く多くの人びとに！」のスローガンとして、音楽を愛好する広範な国民各層の要求を組織し、良い音楽を国民大衆の中に普及する事を目的にし、労働者・農民・市民・青年・婦人等の大衆的、民主的な音楽運動である労音の性格を明らかにした。

このような立場から、より多くの音楽愛好者の要求に応える労音運動を展開し、多くの音楽家の協力を得て、オペラ・バレェ・オーケストラ・ミュージカル・邦楽などの幅広いジャンルの要求の実現のため努力をしてきた。1960年代から労音運動の目的が、音楽を創造すると言う〝創造団体的〟傾斜の傾向が生まれた。当時の社会情勢は、池田とケネディ会談後ガリオア資金の充実、池田首相が文化人・芸術家への働きかけ、「東京世界音楽祭」の強行、ライシャワー路線の強化などがあって、鑑賞組織も創造問題に一定の関心が要求された事情があった。この音楽状況に対応しようと1961年に基本任務を決議したが、その中に「労音は・・・音楽文化を創造する事を目的としている」が盛り込まれた。この規定は、広範な人びとの多様な音楽要求の実現する上で、民主的な組織原則を曖昧にしてしまい、様々な誤りと逸脱のもとになった。一つの団体が創造眼帯的性格を持つと、創造方法に独自の考えを持つようになり、その団体に集まるひとも限られてしまいます。そしてその性格が強まれば、幅広い大衆組織としての労音との矛盾が生じ、活動が狭まってしまう。現実に、旧基本任務決定後、労音の性格を歪めるような論文が機関誌に掲載され、創造団体としての傾斜が加速した。1962年の第一回伝統音楽研究集会」では、音楽界の第一線の人びとにより貴重な報告が行われ、伝統音楽への関心を高め大きな成果を上

げたが、一方音楽の民族性を狭い枠で考える誤りや、一部の労音に創造団体的性格を強める影響が生まれた。また、各地労音で労音活動家を養成する労音学校が開催され、この時期の基本任務に規定された創造的性格を強調する文章が出された。

2、「勤労者の立場に立つ」スローガンでは、〃より多くの人びとに〃と表され、本来は労働者、農民、青年、学生、婦人を含む国民各階層の筈で、あたかも労音運動が階級的意識に貫かれた人だけの集まりの様に狭く捉えられ、労働者や先鋭的な者しか入れない組織に誤解された。(反動攻撃の的になった) 労音は、大衆的で、民主的な音楽鑑賞運動ですから、音楽を愛好する全ての人が、誰でも個人でも加入できる組織です。同時に、職場、農村、地域、学園など広範な市民の中にサークルを作り、会員を増やす活動を重視する組織でなくてはならない。そして運営は会員の意向を中心に行う原則をハッキリさせました。

3、　新しい基本任務では「情操と教養を豊かにするような過去と現在にわたる内外の音楽」としたが、これは労音運動の言う良い音楽の中身で、良い音楽の鑑賞を通じて人間的な成長を目指すことです。労働者が創造と労音運動の主人公と言う事から、専門的創造活動や専門家への無理解な言動や、粗雑で乱暴な「音楽批評」を押し付け、自分たちの創造理論や方法に近い者だけを評価して、特定の専門家にのみ偏ることもあった。その結果、労音運動に協力する専門家の幅を狭め、信頼と協力の関係を其処ねる事も生じた。これらを改め、多くの専門家と協力する事と、広範な進歩的民主的運動と連帯することをハッキリさせる。

1967年頃から、労音運動停滞の克服に取り組む討議の中で、これらの誤りに気付き改善を積み上げてきました。そして、運動の欠陥をリアルに見つめ、その根源となった旧「基本任務」を労音運動の初心に返る内容に改定する結論に達した。今後は、新「基本任務」を運動の指針として、100万人の労音運動を目指し、25周年に向かって三ヶ年計画を達成するべく、前進しよう。

基本任務改訂と合わせての名称（△△勤労者音楽協議会＝△△労音）の変更について、全国労音常任幹事会議より「勤労者＝労音と言う概念で、それ以外のものと区別し、自ら幅を狭めてはならない。より広い国民各層を対象とした鑑賞運動とその組織が課題であり、労音と言う名称に拘るのは誤りである」結果、245団体中22団体が名称を変えた。(□□音楽鑑賞協会、□□新音楽協会、□□良い音楽を聴く会など) だが、これらは名称変更による組織拡大はならず、長い間馴染み深い名前（広辞苑をはじめとした主要国語辞典に掲載）が消滅し、馴染みのない鑑賞組織として一般に映った。

全国の労音による共同企画の幅が広がった。(ミュージカル「青春の歯車」の再再演が６４回、オペラ「フィデリオ」の再演９回、赤い鳥９５回、布施明７０回、ザ・ピーナツ５０回、チェリッシュ６４回、和田あき子３８回、岸洋子３５回、尾崎紀世彦１８回が取り組まれた。銚子と田辺が新団体として加入し、総会員数は２１万１千名になった。

（つづく）

石岡市指定文化財（十）

兼平智惠子

当〃ふるさと風〃先月号（第一五三号）にて筑波山のイメージの庁舎と石岡駅前筑波山の壁画について触れましたが、実はもう一か所筑波山が描かれた壁画があります。

石岡市の皆さんご存知でしょうか…。

石岡駅より石岡郵便局本局前を通り泉町交差点に向かいます。その交差点を右折（旧水戸街道に入ります）しますと、平成一四年七月竣工泉橋の入口になります。左側右側それぞれに二か所小型な壁画ですが、七重の塔と筑波山が描かれてあります。そして説明文に注目するとまさしく「歴史の里いしおか」、常陸国の国府としておおいに繁栄した時代を彷彿とさせてくれています。

説明文より一部抜粋いたします。

「石岡は常陸国の中心として栄えた街です。今から一三００年前に人口二十数万の国政を担ったその遺跡がこの街に眠っています。天平一三年（七四一）の聖武天皇の詔により、国ごとに国分僧寺、国分尼寺が建立されました。国分僧寺には中門や、仏像を安置する金堂、仏法を学ぶための講堂、さらに七重の塔など建物がありました。

国分僧寺に七重の塔があったことは（残念ながらまだ、七重の塔跡の場所が確認されておりませんが国分僧寺、尼寺共に伽藍の跡のほとんどが確認され国指定特別史跡になっています）、この地が常陸国の国府として隆盛を極めていた時代の象徴であり後世に語り継がれるべき誇りです。ここに暮らす人々の風景には必ず筑波山を背景にしたこの塔が、その勇姿を見せており心のよりどころになっていたのではないかと思われます。」

どうぞ良く晴れた日に泉橋の入口、左側の歩道に立ち、美しい紫峰の山に七重の塔を重ね合わせてみて下さい。

尚、国分僧寺に付随してもう一か所「歴史の里いしおか」として誇る壁画があります。

平成二年完成の「常陸国分寺の雄鐘、雌鐘」にまつわる伝説が描かれています。残念ですが石岡駅下り線ホーム内にあるため、電車を利用しない方は入場料をお買い求めの上観覧することになります。常時見ることの出来る場所にありましたならば、より多くの皆さんの心に残り、後世に語り継がれていったことでしょう。

本題の石岡市指定文化財の紹介に入ります。

常陸國總社宮随神像（左大臣・右大臣）

有形（彫刻）

昭和六〇・十一・八指定

隋神像二体は、延宝八年（一六八〇）に　京都五條通リ、大仏師・寂幻の作で、檜木材を用いた寄木造である。右大臣は朱、左大臣は群青色であるが、現在では剥落が激しい。左大臣像の一部に金箔が残っている。正徳・明和年間に二度の彩色が施された。肩の張り、袖の張りは武人の尊大さを醸し出しており、神社を守護する風貌は、長く民衆に親しまれている。

尚平成二四年に修復士　飯泉大子宗（桜川市）により「石岡市常府いしおかの歴史的建造物等保存事業」の一環として解体修理が行なわれた。本来の持ち味を尊重するため「古色仕上げ」の手法を採用。力強い姿の像が復活することになりました。

常陸國總社宮本殿

有形（建造物）

平成一七・四・一四

寛永四年（一六二七）、時の領主、皆川山城守（皆川隆庸）の命で建造された。境内では、最古かつ最重要な建造物。天神地祇の六柱の神々が鎮座する。本殿の特徴の一つに、内陣と外陣間仕切りの桟唐戸（さんからど）の仕様がある。観音開きの桟唐戸で普段見る機会のない扉である。

現状は、赤漆塗り仕上げで、その上に三～四寸角の連続模様の痕跡がある。これは金箔が剥げた痕跡で金箔が貼られた造りは、県内のほかの神社に類例を見ることはできないといわれている。

また、この扉の裏面には天和三年（一六八三）寄進の年号と寄進者九名の名前が刻まれており、本殿の建築時期を特定する貴重な資料である。

昭和三九年に拝殿を焼失した火災の際、耐え抜きましたが、東日本大震災では、早期の修理が必要と判断され平成二八年に大規模修復を完全に遂行しました。

千木（ちぎ）と鰹木（かつおぎ）について

千木は本殿の屋根の両端で交叉させた部分で、鰹木は、屋根の上、棟に直角になるように何本か平行に並べた部分です。共に本来は建物の補強が目的だったと考えられましたが、後に装飾として発展し、現在では神社の象徴するものとなっているそうです。

千木については、先端が外削ぎ（そとそぎ、地面に対して垂直に削る）になっているものと、内削ぎ（うちそぎ、先端を水平に削る）になっているものがあり、祭神が男神の社は外削ぎ、女神の時は内削ぎになっていると言う説があるが、俗説であると説く研究者もおり、神社本庁の公式見解でも「必ずしもそうとは限りません」という事に留めているそうです。

鰹木は、形が鰹節に似ている事が由来とされ、奇数が男神、偶数は女神を祀っていると言われているが、やはり俗説と言われ、神社本庁の公式見解でも、「本数は神社によって異なります」とのことです。

古くは、古墳時代の家形埴輪に千木、鰹木らしき物が存在する様子が、今城塚古墳（大阪府高槻市）出土の埴輪等に見られ、首長（天皇または豪族）の宮殿と見られる家のみにあることから、古墳時代においては千木と鰹木を上げて母屋を作る事が出来たのは首長の家だけだったらしいことが言えるそうです。

どうぞ各神社参拝の折には、その神社の祭神と千木、鰹木にも目を向けて、深い歴史をたずねて見て下さい。

参考資料　常陸國總社宮境内、説明板等

智恵子

○健闘祈る　常陸の國　石岡一高球児

立　春

伊東弓子

“鬼はそと　鬼はそと
福はうち　福はうち
天打ち　地打ち　四方打ち
鬼の目ん玉　ぶっつぶせ“

今年も山の上の雷電宮で暗の中、大声で豆を播いた。この掛け声は夫から教わったもので子供達と、声を張り上げて豆まきをしたものだ。夫の父親（私の舅）は天童の人だった。舅も天童の家族とあの大きな家で豆まきをし、夫も多勢いの家族と荒川沖で豆まき、鬼退治をしたのだろう。子供達と私は、残業で遅くなる夫を待たず、社宅の人達と賑やかに豆をまいた。それから子供と寺に行ってこの山（雷電山）の雷電宮にお参りするのが、春をむかえる楽しい行事だった。今は犬と私が来て帰っていく形となった。息子は家族の所で節分を祝っていることだろう。賑やかだろう。いいなあと羨ましい気もする。犬に昔語りをしながら暗い道を歩くのも春待ったのしさでいっぱいだった。

大井戸の方（東南）からくる道は、雷電山の山の下から大宮神社参道へと繋がっている。

江戸時代の絵図には山林の続く一体の中に寺があり、神社がある。この大きな山林地帯のしぼり水は、東側は涌井から谷津田へ、南側は山門下の谷津田へ、西側は西迎院下の谷津田へ、北側は玉の井から谷津田へと潤してくれていたのだろう。特にこの地区の米は旨いと評判だったのも頷ける。

雷電宮が祭られている山は帆立貝古墳の上にあたる。寺が出来、その数十年後に大宮明神が出来たと言われているが、参道が出来たのもその頃だろうか。明治二十年代に嫁に来た祖母は森の中の参道を歩いたとはなしていたという。流鏑馬も行われたとか。馬と乗り手は小屋で一週間～十日寝泊りを共にし、その日に備えたと、下高崎のあのお婆さんが聞かせてくれた。

“春は雷電まつりから”母が祭りの知らせに必ずしるしていた言葉だ。祭りは旧三月二十八日だったが、国の政策で養蚕が盛んになると、稲作準備と養蚕の忙しさの為、祖父の時代に新暦に変わったそうだ。玉里五千石の中心だった雷電山は玉里地域で一番高い山の上で、農作物の豊作を願い雨乞い、雷・雹の被害を一手に引き受け守ってくれると信仰厚い社であったことが江戸時代の文書に記されていた。戦前迄は賑わった祭りも昭和二十年代には、露天商が二軒、間もなく一軒になって信仰と共に消えていった。

玉里五千石という川中子、下玉里、田木谷、上玉里、高崎地区から人が集まったと聞く。参道を取り巻く台地は時代と共に変わっていった。明治の初め北側に小学校が出来、役場が出来た。出入り口は大宮神社側の道からだった。大正末期参道沿いの森を伐採するのを手伝った橋本先生の話しを聞かせて貰ったことがある。二十年代小学生となった私は、東側に新校舎とよぶ三教室つなぎの建物、物置、外便所、西側には遊具類が広い運動場を取り囲んでいるのを覚えている。江戸時代の森の面影はないが、校庭中を時々牛や馬車が通っているのも抵抗なしに見ていたし、糞の始末もしていた。参道だったことが分かったのはずっと後だった。

子供時代は、専ら大宮神社に豆まきに行った。参拝者は多かった。姉弟三人で歩いていると、上級生の男性、三・四人に会った。「宇宙にロケットを飛ばそうという時代に、こんばん提灯とは・・・ね」と笑っていたのを思い出す。帰りは社の後を廻って、厄年の人が落とした御捻りを捜した。厄の数だけ落とすそうだ。それを拾って上るのがいいのだそうだ。私も一度だけ四十二円入った御捻りを拾った。帰りは角の“いなもと”で駄菓子を買って三人で分けたことも遠い昔となった。

神社の森に沿って古い道がある。真直下へ下ると亀塚、外山へ行く。左に曲がると、府中に行く古い道だ。目の前を昭和四十年頃造った救済道路が左から右下へ走っている。左側の稲荷の森の前を発掘した時、まちがいなく官道であったことが分かったと聞いた。

円妙寺街道も府中へ行く道も、第二トーホーランドを通る。以前は森の中だったが、家が増え道路が広くなって確り存在している。右林の中に小さな塚が幾つかある。飯塚館の姫君が夫の武運を祈って造ったものらしい。府中へ行く道はペンテル工場の東角の中に入って行く。左にある石仏は村境、分かれる所にある。円妙寺街道は左に行ったのだろう。工場内を斜めに道があり、丁度向上北入口に続いていた。昭和三十年代中半頃迄はすすきの原、新高浜駅に通じる手前で旧県道（往還道）と交わっていた。新高浜地区は旧県道がはっきり残っている。こうして道が変わっていくのを、ズルズル今書かずに後にしようとか、ああ！橋本先生にもっと詳しく話しを聞いておくべきだったと、今になって思う。

雷電宮に戻って南の方へ行ってみよう。雷電山信仰を大事にした川中子、下玉里の人達の歩いた道は、大宮明神と確り繋がって存在していた筈だと思う。

さあ、南東に向かって出発してみよう。」学童保

育の子達が遊ぶ広場、道標、六地蔵そして舟塚古墳もすぎると、八方内（はぽうじ）辺りから古道に入る。いぼ地蔵、薬師堂、その先まではっきりしている。昭和四十年代に出来た農免道路と、離れたりくっついたりして観音堂辺りまではわかるが、左側の畑道の方に稲荷神社があるからそっちの道か、それとも天王様の所を行くのかはっきりしない。下り上りして八井（やい）の傍を通ったのは大丈夫間違いない。又その先が分らない。右に行っても墓地から庚申塚の傍を通るのかな迷ってしまう。大井戸の友が畑から来る時、庚申塚を通って来たと自慢をしていたことがあった。大井戸の鈴木さんが嫁に来た頃、女達が家の前の道を通って畑から上るの方へ行くのが常だったと話していたことがあった。鈴木さんも具合が悪くなってしまった。何で早く一緒に歩いて教えて貰わなかったかと。過ぎたるは及ばざる如し。

貧しい体験と拙い想像で古道を考えて、自己満足してはまずい。道は私を次の世界に繋いでくれる。この道を子供達に伝える為に確めて来よう。

家庭をもってから子供達との豆まきは楽しかった。社宅での豆まきの後、寺に行く準備、何種類もの豆を持って、お賽銭とまく豆は各々が持って家を出た。堂の隙間に毎年角いわしと柊が飾ってあった。そこで一休み、甘納豆、五色の豆、落花生を少しずついただく。良善坂を下って右に曲がる頃は、うきうきしてくる。“父や母が待っていてくれる”そう思うだけで一日の疲れも何のその、本堂の前で観音堂の前で大声をあげてまく。又一休みし豆を食べている所へ父母が出て来てくれる。別れに菓子を貰って雷電山に登り豆をまく、同級生の家まで届く位きそって大声を出した。小さな外燈の下で残りの豆を食べて石段を降りるが、楽しみがなくなった様子は見えても頑張れたものだった。懐かしいあの頃の豆まき。「明日は立春、春だよ」と、眠りつく・・・頃には夫も帰ってきた。子供がいた、夫がいた、親がいた。身近な人がみんないた。今は、子供達それぞれの家庭で鬼払いをしていることだろう。この故郷で育った子達の為にも、不明な道を確かめに行こう。

“明日は立春だ”　と私が

“ワン（春だね）”　と犬が答える。

平成三十一年二月二十七日（水）

東金砂神社

小林幸枝

茨城県常陸太田市の東金砂山の上にある「東金砂神社」は平安時代前期に開基された歴史ある神社です。源頼義・義家親子が奉納したと伝えられる御宝刀や、日本一開催間隔が長いレアはお祭りがあることでも有名です。また、パワースポットとしては日立市にある御岩神社を凌ぐとの声も聞かれ、生命の強さを感じる神社です。境内は木々に囲まれ、ひっそりと建つこの神社に出かけてみませんか？　心身共に浄化され、運気もアップすること間違いなしです。

この「東金砂神社」は平安時代前期に平城天皇の勅願により、宝珠上人が比叡山の麓の近江国（現在の滋賀県）にある日吉大社（山王権現）の祭神を分霊して祀ったと伝えられる歴史ある神社で、建立当時、『国家安泰・五穀豊穣』の祈願所となり、主祭神は大己貴命（大国主）と少彦名命の日本の国つくりを成し遂げた神様です。心身浄化や気力回復にご利益がありますよ。

表参道は大きな木々に囲まれ、とても美しく、空気も澄んでいて、胸いっぱいに吸い込むと本当に心が浄化されるのを感じます。最近テレビなどでも良くとり上げられる「最強のパワースポット」といわれている御岩神社を凌ぐ霊気パワーがあるというのも納得です。神社へは、急な石段を登り、立派な仁王門がまずあります。さらに登ると、田楽堂があり、そこからさらに石段を登ると釣鐘堂があります。　この鐘も自由につくことが出来ますが、鐘をつくのは参拝前がよいとされ、まずは、「お参りに来ましたよ」という合図を送るのです。参拝の後に鐘をつくのは「戻り鐘」といって縁起が悪いそうです。

御本殿に掛かっている神紋は、この神社を守ってきた戦国武将「佐竹氏」の「五本骨扇に月丸」の紋です。この本殿も、大きな木々に囲まれて、生命の強さを感じる場所です。

心身浄化で運気アップ間違いなし！　東金砂神社に是非、お参りしてください。

父のこと（7）

菊地孝夫

戦後復員してきた父は昭和22年、宮嶋サトと結婚する。12月に長男康夫が生まれる。

翌年男の双子・秀雄，良雄を出産するが、未熟児のため数日で他界する。今なら助かったのであろうけれども当時の医療では無理だった。乳首が咥えられないので綿に含ませて飲ませたと母が話してくれた。生きていれば、お前も真理子も生まれなかったのだとも言っていた。

昭和25年、4男・孝夫が生まれる。昭和27年、長女・真理子誕生。

間もなく祖母・あきとのあいだに康夫をめぐって争いがあり母サトは心労から心を病んでしまう。康夫の奪い合いになり衣服がビリビリに裂けてしまったという。都会育ちの母と、祖母とではウマが合わなかったのだろうか。祖母・あきは出来のいい父を溺愛したらしいのでいわゆる嫁・姑の争いだろうか。

始めは土浦の病院へ入院したが、思わしくなくより設備の整った東京の病院へ転院する。

その間、残された幼い3人の子供の世話が大変で、困ってしまった父はやむなく次男・孝夫を旧美野里町羽鳥に住む母方の祖父母に預けた。

この時のことは幼すぎて私の記憶にない。

母の回復までのことは父が残した手帳に細かく書いてあった。母の使っていたものだが、はじめは読めるのだがだんだん文章が目はクチャになりしまいには記号のようなものや縦横の線になったりで意味不明のものになっている。そのあとに父の文章が几帳面な細かい文字で書かれている。近所の人に対する感謝の言葉が繰り返し語られている。列車の中であった見知らぬ人に助けられたことも書かれている。

世間一般には、精神疾患に対する偏見がいまだに根強いものがある。

最近ようやくその一つ、うつ病に対する世間の認識が変わってきた。その患者数があまりにも多くなり、社会に与える影響が無視できなくなったためである。とはいいながら、世界の中で精神医療の分野についていえば日本は全くの後進国である。例えば、国の予算をとってみてもこの分野に対する予算は他の福祉医療分野にくらべても圧倒的に少ない。

なぜかと言えば、儲からないからである。選挙の票にもつながらないからである。私の知る限り国会議員に医者は幾人もいるが、精神科医は一人もいない。

認知症や身体障碍者に対する予算は多いけれど、精神障碍者に対する予算はまことに微々たるものである。なぜならば、精神疾患を患った人の多くがちゃんと発言できないからである。体に障害があっても何らかの形で意思の疎通を図る事はできる。IT技術の発達で運動機能が失われても眼球の動きをセンサーが読み取り文章にしてくれる。あるいは音声にしてくれたりもする。いっぽうで、精神疾患者は己の意思を正確に他者に伝えることができない。

大企業・官公庁では何パーセントかに精神疾患者を雇用することが、義務付けられてはいるが、これまた微々たるもので、法的強制力が強くない為に一向に進んではいない。営利追求を目的とする企業にとってはまさに厄介者なのである。

昔の名残が今も残って、座敷牢のように家の奥深く幽閉しているケースがある。個人の問題ということで行政も深くかかわらない。こういうときだけ「人権」を持ち出してその言い訳とする。

手っ取り早く進めるには、官公庁の職員に大量採用するのが一番いい方法なのだがこれも一向に進んでいない。

最近になって、A型事業所制度というものが作られ、知的障碍者や、精神疾患者の雇用の手助けをやろうとしている。

しかしこれにも、早くも金儲けを図る悪い輩が参入して補助金をかすめ取っている。監督官庁・厚労省の対応は例によって後手、後手に回るばかりである。老人福祉施設でのこれと同様の不正が何度も起きているのに、いろいろと言い抜けて役所は一向にまともな対策をしようとはしない。

今の政権の自民党、公明党およびそれの補完政党の希望の党と日本維新の会等々どこもこの問題にまともに向き合っていない。

優れた知識を持っている人でも、残念ながらこのことには疎い。

マスコミもまた然り。凶悪犯罪が起き、その犯人が、頭がおかしいということになると連日ワイドショーで報道する。

しかし殺人を犯す大多数はいわゆる正常な人である。統計的にも明らかであるのに、そういうことはほんの小さくしか報道されていない。「バリアフリー」とか言っているが「心の中のバリアー」が解除されてはいない。

先ごろ話題になった、患者に対する堕胎手術や去勢などは、かの「ナチス」が行ったおぞましい犯罪と全く同じ発想である。

それと同じことを日本の国家機関が主導して行った。解らない人はヘルムート・ギュンターの「夜

と霧」を読んでみて欲しい。ユダヤ人らのほかに精神疾患者も大量にガス室に送ったのである。
軍にしてみれば兵士として、使い物にならないからである。
多くの医師や看護婦がそれに手を貸して平然と殺人を行っていた。精神疾患の一つに「殺人淫楽症」というものがあるが、彼女らの何人かは明らかにそれに分類される。
患者の苦痛を見て喜んだり、出血を見て喜んだり、挙句の果ては殺してしまう。最近の日本でも、ときたまニュースになる。犯人に女性の看護士や、介護士が多いのも特徴である。彼女ら固有の病理として、自責の念はない。罪の意識が希薄なのである。
女性の持つ母性本能は、傷ついたもの弱い者を優しく包む、という男性にはない優れた特性がある。たとえ敵であっても、傷ついたもの・弱いものを思わず助けてしまう、あの「ナイチンゲール」の精神である。
「戦時下」ではないにもかかわらず、国家的犯罪であるのにそれを主導した日本政府、医療関係者、そのほか行政機関の関係者は摘発もされないし何ら処罰もされない。おおむね権力がらみの犯罪は時効を盾に逃れてしまうことが多い。「個人情報保護」とか言って、公文書も墨塗りで真っ黒になっていて何が書いてあるかさっぱり解らない。情報公開法もザル法で十分とはいえない。
日本は中国や北朝鮮などよその国々を「人権」・「人道」で盛んに非難しているが、権力によって人権が踏みにじられている点では日本もそれらの国と変わらないのではないのか？

【風の談話室】

《読者投稿》
やさと暮らし（25）

さと女

今年の冬は・・・暖冬？厳冬？　寒暖の差が激しく体が付いていけない。

◆冬景色・・・

・昨夜久し振りの雨、その後雪となり、うっすらと雪景色になった。空気がキーンと張り詰めている中、リビングのカーテンを開けるとそこには金星が見えた。今日はその金星のすぐ近くに三日月が、何とも美しかった・・・。

・知人お茶飲みに、寒くて何もすることがないので３人で情報交換。予定の無い夫は、昼過ぎ小雪チラつく中、畑の中のテントの修理を、このテントは過去何回風で飛ばされたか、その度作り直し、作って遊ぶのが楽しいという。要するに気分転換の様です・・・

・何時もどおりの朝の風景にホッとします。今日は一日中強風か吹き荒ぶとか・・・春一番らしい空は澄み渡っていました。春は猫たちの恋の季節・・・庭先が賑やかです。

・ある日、立ち寄った楽市さんの庭、福寿草があっちこっち咲き、梅が咲き、庭は広い駐車場になっていた。我が家の庭にも咲いている。春にはみんなで花見かな？

◆石岡の街散歩・・・

・〝風の会〟会報作りの日、夫は泊まり込みジオパークの会議の為代理で参加。終了後石岡街並み散策、16日から雛巡りが始まり、イベントも行われるので人の流れが、でも今日は冷え冷えとしていた。折角なので駅前のかんばん横町に行って見た。パン屋、パスタ屋、カフェ？焼き鳥屋、４件のお店があり、パスタ屋の若い主と目が合ったので入って見た。パスタは生麺でモチモチとして美味しかった。若い店主さんは「まだ皆さんに知れ渡っていなくて・・・！」と、少し寂しそうだった。お客さんがいなかったので色々世間話を、隣のパン屋で土産を買って・・・。

・駅前のマリアージュで山本恵莉子ライブ、ファンで客席はいっぱいです。ライブのたびに、上手くなっていく恵莉子さん・・・石岡、そしてみんなを元気にと言う姿勢が伝わってきます。そして、客席は熱くなっていきます。オリジナル曲はもちろん素敵ですが弾き語りで歌った、中島みゆきの「時代」は、とても素敵でした。

◆誕生日・・・

・何回目かの誕生日を無事迎えることが出来ました。日々色々な事がありますが、前を向いて何事にも希望をもって過ごして行きたいと思います。これからは地域を大切に、地域の皆さまと、此処で老後を送れて良かったと思えるような、そんな、つながりを大切に生活して行きたいと思います。今日はオリーブさんでのクラフトの日。ママさんの気づかいで、手づくりケーキでお祝いして頂きました。みんなで美味しさと時間を共有、楽しい誕生日を過ごせました。ＦＢでも、沢山のメッセージを頂き有難うございました。年金友の会ＪＡ

からもプレゼントが届きました・・・。
・昨年暮れ、地元の小田島さん（芸術家）にお願いした人形の椅子、今日届けに来てくれた。人形は、夫の妹（つくば在住）が作ったランドルフ人形です。人形の体内にはひつじの毛が詰まり、髪の毛や洋服は天然の良さを生かして、シンプルな中にファンタジーの世界を感じさせてくれます。赤ちゃんが舐めても、一緒にお風呂に入っても大丈夫、汚れたら洗い破けたらつくろって、長く大切に付き合ってほしいと言っていました。今日からこの椅子に座ってお客様を迎えてくれます！

◆お出かけ色々・・・
・友人夫妻に誘われて塩原温泉に，途中，夫妻の娘さんの家（矢板市）に寄ってそのあとは彼女の案内で秘湯の温泉に、両側に積みあがった雪、くねくねした道の奥まった所に秘湯。古びた建物の中に数種類の温泉があり、急斜面の雪山を眺めながら温泉を堪能した。帰りは彼女の予約してくれたイタリアンのお店に、留守番の夫の顔がちらっと浮かんだが、美味しい料理に話が弾んだ。
・「追悼―小林恒岳展」鑑賞会に参加、石岡市のラッピングバス2台で出掛けた。途中鵜の岬で昼食を済ませ海岸の景色を楽しんだ後、美術館へ。先生の若いころからの作品が年代順に展示され、今回初めて見る作品がほとんどで、学芸員さんの展示解説を皆さん熱心に聞き入りました。在りし日八郷の吾国山の中腹のご自宅に、何度もお邪魔した事など思い出しながら鑑賞して来ました。近いうちに霞ヶ浦の方でも開催する予定だそうです。帰路の空は夕焼けで燃えていました・・・。
・真壁のひなまつりに行って来ました。楽市さんのお誘いで車に同乗させてもらい、出かけると湯袋峠は工事中で通行止め、上曽峠は昨日の雪のせいかスリップ事故でダメ、板敷き峠の方を回って，ドライブ気分で真壁まで・・・。各店舗に飾られたお雛様や吊るしびなを見学しながら露地裏のほうのお店も廻って、店主の方達と色々話をしながら・・・何時のまにか沢山の買い物をして楽しいひなめぐりでした・・・。
・フェースブックを開けると時に思わぬ情報が目に入る。今日は友部駅前のトモアでの映画の情報をみつけ早速出かけた。何年も前アカデミー受賞作となったシャインのモデルとなった伝説的な天才ピアニスト、ディヴィナとギリアンのドキュメント。天才ピアニストとうたわれたが精神を患い、11年間もの闘病生活、奇跡の復活後の生きる楽しさに溢れた生活、ピアノの演奏がずっと流れ久々に余韻に浸り、トモアのカフェでのランチ時、知らない人と思わず良かったね、と・・・。
・月一度恒例のオリーブさんでのランチコンサート、今月は地元のオカリナサークル、ポコアポコさん大勢で演奏に来てくれました。ギターの演奏も加わってお客さんを楽しませてくれました。演奏の後はランチタイム、お話が弾みました。来月も第3金曜日、11時30分からです。お待ちしております・・・。

◆小春日和の日々・・・
・日中は久しぶりに暖かくなった。先日花木センターで買ってきた植木などを植えて、あたりを見回すと球根類が芽を出しクロッカスやクリスマスローズが落ち葉の中で咲いていた。農家さんも動き出し散歩中久しぶりの人とも顔を合わせた。5時過ぎ、筑波山の向こうに陽が沈むと、空が山が噴火したように大暴れ、刻刻と変化する夕日をしばらく眺めていました・・・。
・昨日に続き暖かい、朝やってきた知人と外でのお茶のみ、日差しが熱すぎ上着も脱いで・・・。午後は駐車場で、竹ひご作りの練習を、中々うまく出来ないが、何とかコツがつかめた感じ。だが、使えるひごは1本もない。そうこうしているうち夕方に、今日は何とも優しい夕焼けだった・・・。
・懐かしい写真が出て来た。八郷に移って来た頃、まだ50代、引っ越し祝いだったかな？那珂湊の方からアンコウを一匹買ってきて、庭先で吊るし切りをした。あんこう鍋を作り大勢で鍋を囲んだ事など思い出した。確かあんこう一匹、1万6千円だった・・・

果樹農園が並ぶ13塚、少し横に入ったところにある三宝園、そこに立ち寄った夫が作業中のご主人よりお土産をいただいて帰ってきた。なんと時期外れの柿、それと、柿とリンゴのドライフルーツ、甘さとフルーツのいい香りが口の中に広がった。ドライフルーツは素材も加工も三宝園、美味しいです。お土産にいいなと思いました・・・。
・昨日隣の畑で耕運機のうなり音が、今日はビニールが張られ、たばこの苗を植えるばかりになっていた。杉の山も色を変え今にも花粉が飛んできそう？春がどんどんやってくる。

◆よもやまはなし・・・
・同級生の連れ合いさんの訃報を聞き急遽告別式へ、帰りのタクシーの中、どこからですか、との運転手さんの質問に、石岡ですと答えると「石岡一高」よかったね。甲子園出場おめでとう、実は私「石岡一高卒業、と言っても50年前ですがね」いきなり車の中が盛り上がった。何年たっても母校の活躍は嬉しいものなのですね・・・。羽鳥駅

はどんどん工事がすすんでいる。果たしてどんな風に変わるのかな・・・？

・我が地区でただ一軒の居酒屋？浅草生まれ、浅草で育った夫は、八郷に移って来た時ネオンがないことを嘆いていた。だが我が家から一分の所にこのお店があり、それが唯一の救いだった。オーナーご夫婦はキノコ採りが一番の楽しみ、キノコのシーズンはじっとしていられない。以前は福島方面に行っていたが、震災後は新潟のほうへ出かけている。ここのキノコうどんは実においしい、キノコがたっぷり入っている。今日は久しぶりに、シシタケのキノコうどんを食べた。出汁がよく出て美味しかった・・・。

《風の呟き》
西欧の同族

打田昇三

古い話だが昭和天皇が崩御された日に私はハンガリーの首都・ブダペストに居て、帰国の為に空港行きバスの出発を待っていた。其処へ日本語の達者なハンガリー人ガイドが深刻な様子で乗り込んできて「…昭和天皇が亡くなられました…お悔やみを申しあげます…」と丁寧に挨拶をしたのである。余り知られて居ないがハンガリー人は日本人と同系であることを実感し、深く感謝した。

かつて民族大移動の原因を作ったフン族が消えた後に、同じく中央アジアの騎馬民族であるマジャール族は黒海付近を放浪してから九世紀にローマ帝国の属領パンノニア（クロアチア辺り）を抑えて其処に小さいながらも王国を築いた。当時の西欧には是に対抗する騎馬軍団が無かったようで馬力を持つ民族は西暦八九六年頃から更に適当な盆地を探して西へ西へと進んで行った。

ハンガリーはマジャール族子孫の国とされており、ヨーロッパ唯一のアジア系民族と言われる。第二次大戦の末期に日本・ドイツなどと同盟していたのだが、ヒトラーの暴走に呆れて戦争中止を図ったところ、是を察したドイツ軍が駐留して来た為に日本同様の空爆被害で大都市が壊滅した。戦後はソ連軍に占領され必然的に共産圏国家にされたけれども、アジア民族特有の粘りと融通性に加えて豊かな大地・恵まれた農業資源を力として新しい形の国家を形成している。

ブダペスト空港でも、出入国管理の役人は窓口の客が日本人だと分かると「…パスポートを見せて下さい…」などとアクセントの強い日本語で応対してくれるから、一瞬、此処は国内かと錯覚してしまう。民族の共通性は不偏のようである。

小さな共和国

打田昇三

「共和国」と名が付けば其れ相応の自然・設備を有する国土が必要と思うが、中には山も川も湖も無く、鉄道も通じていない小さい国がある。

その国は長靴形のイタリア半島に蹴られたようなシチリア島から更に九十キロ離れた地中海にあるマルタ・ゴゾ・コミノの三島で、一九六四年にイギリス連邦から独立し「マルタ共和国」を称しているが国土は全部の面積を合わせても日本の小豆島の約二倍、人口は四十万人に満たない。それでも首都をマルタ島のバレッタに置いて、国語はアラビア語の一方言とされるマルタ語を使っているほか、英語・イタリア語も通用する便利な国で小規模だが空港も港湾も整っている。

日本の公使館や領事館は無いけれども大正十年には皇太子時代の昭和天皇が訪問しており、徳川幕府の末期には「遣欧使節団員」として福沢諭吉らが立ち寄っている。更に第一次世界大戦では、当時、イギリスとの同盟関係にあった日本海軍が、此の島を基地にドイツと戦ったので七十一名の戦死・戦病者が出て、其の方々の遺骨は日本に戻ること無く遥か此の地に埋葬されているのである。

マルタ島は、樹木が繁茂していない上に海岸線は断崖絶壁も多いから耕作地が少ないけれども日本の様な夏の湿気は少なく冬は暖かい。地中海における戦略的要地なので古代国家のフェニキアを始めギリシャ、カルタゴ、ローマ帝国などに侵略されアラブやスペインなどにも苛められ続けた。十六世紀にはオスマン帝国が支配してヨハネ騎士団に与えたのだが、是をナポレオンが占領した。二年後にはイギリスが奪還して独立させたので、ナポレオンだけが余計な事をしたことになる。

韓国「七放」の嘆き

菅原茂美

現在、韓国は就活において「七放」の嘆きに苦しんでいるという。若者は就職を目指すためには、７種目の希望を捨てているという。２０１０年頃までは「恋愛」「結婚」「出産」の、３放であったが、だんだん厳しくなってくると、「人間関係」と「マイホーム」が加わり、５放、そして現在は「就職」と「夢」までも含め７放に達しているという。

これでは若者たちは、何を目当てに就活に励んだらよいというのであろうか？　７つの人生重大イベントを放棄しても、希望の就職ができない苦しみは察するに余りある。

ソウル大学を卒業しても、希望するサムスン・ＬＧ・現代はまず夢のまた夢。学生の多くが、財閥系のグローバル企業を目指す。数百倍の狭き門だという。ましてや中小企業では採用難に悩む。３０歳の新入社員も珍しくはないという。韓国の１５～２４歳の若年失業率は１０％前後で高止まり。日本は３，７％と低い。

さてこのような現象は対岸の火事ではない。英語力など強い学生が、日本のソフトバンクや日産自動車などを希望し、すでに日本人受験生を押しのけ８０人以上も合格している。韓国では１９～２２歳は兵役義務化されている。日本企業では兵役で培われた体力や規律性に魅力を感じ、更に英語力に差をつけられているようでは日本人学生もウカウカできない。ましてや日本でも通年採用が一般化すると、若年失業が社会問題化しそうだといわれる。新卒一括採用が崩れれば、多くの若者が就職浪人して大企業を目指す可能性は大きくなる。経済のグローバル化に伴い国境を越えた人材の流動化が進む。現に楽天は新卒採用の技術者の半数以上を外国人が占めているという。日本の若者の覚悟やいかに？

（出展：２０１９年２月１１日：読売新聞）

「癌」のニャロめ！

菅原茂美

４度目のがん発症とは、ホトホト呆れてしまった。83歳、気の利いた人はとっくにあの世でパーティでも楽しんでいる事だろう。早くこっちに来いよ！という声が聞こえなくもないが、チョイ待った。俺にはやりたい事がまだ沢山残っている。しかし、歳に不足はなく、人生の役目は大方終えたのだが…。

人生の役目とは、文学や哲学ではなんというか知らないが、私が信じてやまない「生物学」では、人生とは「遺伝子の運搬役」である。それが決定的人生の役目である。即ち人生とは、自分が両親から受け継いだ「遺伝子」を、自分の子に妻と半分ずつ合わせて引き渡す事。私の場合、それを引き受けた二人の子供は、無事成長して50歳台。長女は開業医を営んでいるし、長男は県職員として頑張っている。ＱＯＬ（生活の質）は、まあまあと言える。

更にその子達５人の孫娘に、しっかり遺伝子を引き渡した事を確認できた。ならばそれで、俺の人生は完了なのである。

５人の孫達は、無事に成長し、一番上の孫（30歳）は唯一文系。早大法科卒。更に子供を産んでくれ、「曾孫」で、２歳になった。俺の遺伝子は８分の１。テレビ朝日のアシスタント・プロデューサー。ニュースの原稿書き。

２番目（26歳）は医者になり２年目。

３番目からは内孫で、長女（22歳）は、現在自治医大４年生。自治医大は17年の国家試験合格率100％。勿論全国第１位。全国の国・公・私立医大81校（定員９４１９人）が共同発行する「医学部進学案内書」の表紙に、白衣のモデル写真となって、大きく掲載された。そんなに美人でもないが、理由を大学に聞いたら、誠実で、とても意志が固いとの事であった。頑固爺さんの頑固孫である。

４番目は国際医療福祉大学看護学科の３年生。お爺ちゃんの面倒見てやりたいから…との事であったが、さてどうなる事やら。これも大学の宣伝案内書のモデルになっている。

そして最後５番目（18歳）は、こんな突拍子もない人間、聞いた事もない。何と有名な国立大学でセンター試験も入学試験も受けずに、合格してしまった。高３の秋、大学に入学案内書要請と手紙（将来の希望）を書いたら、即、面接に来いとの事。意志の固さを認められ、11月には入学許可通知。末孫であるからいつも抱き寄せ、自然科学書やテレビの野生の王国など、存分に見ていたせいか、アフリカで、国連の野生動物保護の仕事をしたいらしい。女には危険なので、そこまで爺は望んではいなかったのに、とんでもない罪作り教育をしたか…と、今更ながら悔いている始末。

ともかく、30歳から18歳まで、確実に遺伝子の継承は完了した。故に現在は、お釣りのような余分の人生と考えれば、がんだろうが、認知症だろうが、どうでもよい。運命を弄ぶ神様にお任せするのみ。主治医や家族が懸命に病気を治そうとする態度には、心から感謝するが、申し訳ないが何もかにも運命と思い、覚悟は十分にできているので悪しからず。

さてがんのニャロメだが、遺伝病ではない。かかりやすい体質は多少遺伝するらしいが。そこで私が日頃考えるのは、日本は憲法で、軍隊は持たない…となっているのだから、軍事費に多大の経費を投じる必要はない。こんな国は世界中どこにもないであろう。ならば、その経費を徹底的に「医学研究費」に充当せよ。今、全世界で最も重要な事は、悪性の病気がなくなる事。これに尽きるであろう。兎に角、軍事費に莫大な金を使うほどアホらしい事はない。何の生産性もない。

敵を殺す前に、敵を造らない・皆仲良しになる。小学生のような幼稚な考えと笑うなかれ！　こんな筋の通った話はないであろう。アメリカがあれだけ莫大な金を使っても、医学の進歩は現状通り。日本人なら、もっと予算があれば、更に素晴らしい実績を残せると思う。山中さんのiPS細胞はもっと早く実用化すべきだ。もしそうなれば、これほど世界に貢献する事例はないであろう。どんな優れた頭脳があっても、予算がなくては、何にもできない。

安倍首相は、歴史に自分の名を残したいのか、世界を飛び歩いているが、腰を落ち着け、日本のためではなく、世界のためになる事に、全力を傾注してもらいたい。

がんの研究はかなりいい所まで来ている。もう一歩ダメ押しの新手を見つけてほしい。政治家は、国のためなどケチな事云わずに、全人類のためを考えて、大きく羽ばたいてほしい。がん重症患者からの切なる願いだ。

【特別企画】

打田昇三の平家物語

巻第九 - （三 - 2）

重衡生捕（しげひらいけどり）のこと

原本の書き出しが「本三位中将重衡卿は…」となっている。此の人は平清盛の五男である。肩書きの本三位（ほんざんみ）中将というのは、従三位の位階を持ちながら従四位の職の近衛中将に留まっていると言うことである。近衛大将の椅子が空かなかったのであろうか、政界を追われた平家にはどうでも良い事なのだが…。

その重衡は平家陣の大手に当る生田森守備軍の副将軍として兄の知盛を補佐していた。何事も大手はメインであるから此処でも激戦があり、気が付けば重衡は家来一人と共に取り残されていた。多くの者は戦場を離脱したらしい。

其の日の重衡は濃紺地に黄色糸で岩に千鳥の群れを縫い上げた直垂（したたれ）に紫色の鎧を着用し「童子鹿毛」と言う贅沢な名前の付いた名馬に跨っていた。最後まで付き従っていたのは後藤兵衛盛長という武士で、此の者は重衡の乳母の子である。盛長も総鹿の子絞り染めの直垂で朱色の派手な鎧を着て、是も重衡が秘蔵する脚に斑点の無い名馬を借りて乗っていた。

撤退が遅れていた二人を見つけて追いかけてきた源氏方の武士は、梶原源太景季と庄の四郎高家である。立派な身なりから「敵の大将軍」と判断して馬が悲鳴を上げるほど鞭を当てて追跡した。

浜辺には平家の「避難者救助用船舶」が何雙か準備されていたのだが敵の追跡が急なので乗船することが出来ない。止むを得ず方向を変え海岸から少し内陸部へ入り須磨、板宿経由で西を目指して落ちて行った。重衡が乗っていたのが屈強の名馬であるから梶原も追い付けない。

そこで梶原は、馬上に踏ん張って少し遠いが遠距離用射撃法で矢を放ってみた。それが重衡には当たらず、気の毒にも馬の背中に命中した。当然ながら重衡の馬は弱る。ところが、是を見た重衡の忠臣（である筈の）後藤盛長が「自分の馬を召し上げられる！」と賢明な？判断をして主君を見限り全速力で逃げて行った。重衡は「どうした盛長よ。日頃の約束を忘れたのか！私を捨てて何処に行くのだ！」と叫んだけれども、盛長は聞こえ無い振りをし、それどころか平家軍の印である赤布まで捨てて一生懸命に逃げて行った。

忠臣に見捨てられた重衡は万事休す、敵は近づく馬は弱る。海に入って死のうと思ったのだが、其の海岸は遠浅である。仕方が無いので重傷にもめげず頑張っていた馬を下り、武装を解いて腹を切ろうとしたところに、庄の四郎高家が梶原源太より先に駆け付けて来て「切腹は宜しく有りません。私がお供しますから…（降伏して下さい）」と言って自分の馬に重衡を乗せ、一応は鞍の前に縛り、自分は家来が乗って来た馬に乗り換えて源氏の陣営に戻って来たのである。

一方、主君を見捨てて逃げた後藤盛長は元気な馬に乗っていたので危険な戦場を難無く逃げ延びて後に熊野に潜み、高僧の尾中法橋と言う人物に匿って貰っていたが、法橋の死後に未亡人の供をして、さりげなく都に来た。しかし、三位中将重衡の乳母の子であると知っていた者が多かった為に「盛長は主君の重衡を見捨てた」ことが知れ渡っていて「ああ！何と言う恥じ知らずな盛長よ。平重衡に大事にされながら其れを見捨てて逃げ、今は予想もしなかった法橋未亡人の供をしているとは憎むべき所業である！」と世間の人から軽蔑されてしまった。其の為に、さすがの盛長も人前では扇で顔を隠すようにするしかなかった。

敦盛最後（あつもりさいご）のこと

平家物語では割と知られた話であるが平敦盛は此の時に未成年なので、此の出来事が無かったならば「平家一族」で括られたかも知れない。平清盛の次弟で参議・皇太后宮大夫などに任官した平経盛の末子（清盛の甥）が敦盛である。

一の谷の合戦は結果的に平家軍の負けとなり、

海に待機していた救助船に逃げ込んだ平家の武将も多かった。「一・二の懸」や「二度の懸」で宣伝も含めて大活躍した熊谷次郎直実は、其処までしなくても良い様にも思うが、さらなる高名を求めて「…平家の若武者たちは、海に待機する救助船に逃れようと海岸部に来るであろう。それを狙う訳ではないが、立派な将軍と一騎討ちをして手柄を立てたいものである！」と思い付いた。

山際から海岸部に行くと沖の船を目掛けて馬を海に乗り入れた立派な身なりの武士を目撃した。垂れには高級な生糸で鶴の模様が刺繍され全体が若草色の豪華な鎧を身に着けて、兜に鍬形の大きな飾りが付けられ、太刀は黄金造り、背にした矢は切斑（きりふ）と呼ばれる斑文の鮮やかな鷲や鷹の羽が使われている。持つ弓も丁寧に藤蔓を巻いた高級品であり、連銭葦毛（白い毛に丸銭の斑文がある）の馬に黄金造りの鞍を置いている。何処から見ても金持ちの武将である。

浅瀬の海だが五、六十メートルほど乗り入れて馬が泳ぎ始めた時に熊谷が浜辺から声を掛けた。

「其処を行かれるのは大将軍とお見受け致した。見苦しくも敵に後（うしろ）を見せるか！戻って戦い給へ！」そう叫びながら扇を開いて招き寄せると折角、平家の船に近づいたのにわざわざ引き返して来た。砂浜に上陸しようとするところを騎馬で押し並んで相手に組み、一緒に落ちて首を切ろうと兜を押し上げてみると、年齢が未だ十、六七歳の少年武士である。

公家風に薄化粧をして歯を黒く染めているが、熊谷の息子と同じ年頃でも、さすがに良い家のお坊ちゃんは綺麗だ！と感心して思わず刀を使う手が躊躇する。そこで「貴方は如何なるお方か名乗りをされよ。（呼び戻して組んだけれども）お助けしようと思う…」と言えば「そう言う貴方は誰か？」と逆に聞かれた。熊谷は「人並みに名乗る程の武士では有りませんが、武蔵国住人・熊谷次郎直実と申す者です」と、一・二の懸では大袈裟に売り込んでいたのに、此の場では遠慮勝ちに名乗ったのである。それを聞いた少年は、名前を聞いたことの無い武士なので「私は名乗らないが、貴方には良い敵であるから首を取り（誰かに見せて）名を聞け。私のことを知っている者は多い筈である」と答えて熊谷に討たれる覚悟を決めた。明らかに熊谷の貫禄負けである。

その態度を見て熊谷は「…あっぱれな大将軍である。此の人を一人討ち取っても、助けても合戦に影響が有る訳では無い…自分の息子・小二郎が〝一二の懸〟で軽い怪我をしてさえ直実は心配であったのに、此の若君が討たれたと聞けば、其の親御はどれ程に嘆くことであろうか…この際は、見逃がして助けよう…」と思って回りを見ると、都合の悪いことに土肥実平と梶原景時とが五十騎程の軍勢で近寄って来た。土肥と梶原とは源頼朝の側近中の側近であり、この合戦でも「監察官」として武士の行動を見ているから、自分の考えていることをとても理解しては貰えない。

熊谷は涙を堪えて「貴方をお助けしようと思いましたが、源氏の軍勢が集まってしまいました。とても逃がすことが出来ません。他人の手に掛けるよりも此の直実がお命を頂戴し、後々の供養をさせて頂きます…」と言い訳をした。其れほどの慈悲が有るなら、最初から功名に逸って出しゃばりをしなければ良いのに、とも思うが…。

少年武士のほうは中途半端な熊谷の武士道精神に呆れて「どうでも良いから、早く斬れ！」と急かせた。それでも熊谷は太刀を振るうことが出来ずにぐずぐずしていたが、切羽詰まって涙ながら少年の首を斬り落とし「ああ！弓矢取る身ほど辛いものは無い。武士で無ければ、この様な苦しい思いをしなくても済んだのに…情け無くも少年を討ってしまった！」と恨みごとを言いながら袖を顔に押し当て泣き続けていた。

暫く経って、当時の合戦の作法に基づき相手の鎧の袖を切り、それで少年武士の首を包もうとした時に錦の袋に入った笛を腰に差していたのに気付いて「…思えば今朝方に（熊谷が一番乗りを目指した際に）平家陣営から優雅な笛の音が聞こえたのは、此の人が吹く音色で有ったのか…戦場で戦う武士団の数が何万騎有ろうとも、戦場に笛を持参する優雅な者は少ないであろう。上流社会の人々は、やはり違っていたのか…」と妙なところで感心をして其の笛を大将軍の義経に見せ最後の様子を報告した。是を知って涙を流さない者は居なかった。熊谷が討った少年武士は後に修理大夫経盛の子息（平清盛の甥）十七歳の敦盛で有ることが判明した。其れを知った熊谷は功名に走って未成年を討ってしまったことを後悔したのであろうか…後悔先に立たずという諺もある。

平敦盛が持っていた笛は「小枝（さえだ）」と名の付いた名器であり、是は祖父の忠盛が鳥羽上皇から賜ったものであると言われた。それが経盛に伝わり、敦盛が笛の上手であったので父親から譲られたとされる。唐の白居易の詩文に「狂言綺語＝きょうげんきぎょ」とあり、是は仏教用語で「音曲などは人々の心を惑わすもの」として慎むべきとされた。敦盛が笛の名手で有った為に若い命を無くしたように原本に書いてあるが、功名に逸る熊谷の強引さが此の少年を不幸にしたのである。

知章最後（ともあきらさいご）のこと

一の谷に攻め込んだ源氏の軍勢にもかなりの死傷者は出たと思うのだが、中央での知名度が低いので平家物語には余り採録して貰えない。その点平家一門は京都で暮らしていたから平安時代の従軍記者にも名が知れていて其の様子が伝わったらしく、此の章段では平家の武将が乗って居た馬の活躍？までも詳細に記録されている。

門脇中納言教盛（平清盛の弟）の子・蔵人大夫成盛は、常陸国の武士・土屋五郎重行と組み討ちして負けた…と原本にあるが土屋は桓武平氏なので教盛と組んだのは別の人物とも言われる。また平清盛の次弟・修理大夫経盛の嫡男である皇后宮亮（こうごうぐうのすけ＝宮内庁高官）経正は、救助船に乗ろうと海岸部に向かったが武蔵の豪族・川越小太郎重房の家臣に討たれた。平家一門の若狭守経俊、淡路守清房、尾張守清定は三騎連れ立って敵陣に駆け入って戦い、活躍をしたけれども一所で討たれてしまった。

平家の中心人物とも言うべき新中納言知盛は、一の谷陣営の大手・生田森の大将軍であったが、戦闘が続く中に何時の間にか周りにいた味方の軍勢が居なくなり、気が付けば息子の武蔵守知章と家臣の監物（けんもつ）太郎頼方の主従だけが戦場に残された。海上に平家の救助船が見えたので三人は浜辺に向かって馬を走らせた。

其れを源氏軍の児玉党と思われる十騎程の武士が見つけて、家紋の団扇（うちわ）を描いた旗印を靡かせながら追い掛けて来た。監物太郎は知れ渡った弓の名手なので、先ず追って来る敵の旗手を射て馬から落とした。それにめげず児玉党の大将らしき人物が知盛に組もうと馬を並べたところへ知章が、父親を助けるように割って入り相手に組んで馬から落ちて敵の首を斬った。立ち上がろうとしたが敵の首が重いので、思わずふらついたところに、児玉党の少年武士が駆け寄って武蔵守を刺して首を取った。直ぐに監物太郎が少年武士を倒し、持っていた矢で防戦してから太刀を振るい戦い続けたが、左の膝を射られて立ち上がれずにその場で討死をした。

新中納言知盛は、その間に海中を二キロメートルほど馬に泳がせて平家の船に逃れた。馬は「河馬では無いのに！」と思いながらも、必死に泳いで船に着いたのだが、既に船は避難者で満員状態になっていて馬が乗る隙間も無い。知盛は止むを得ずに馬を陸地に返すことにした。それを平家重臣の阿波民部（田口）重能が「この名馬が敵のものになっては…」と余計な心配をして射殺そうとした。知盛は「誰の手に渡ろうとも、私の命を助けた馬を殺してはならない！」と言って止めた。

馬は主人との別れを惜しんで暫くは船の傍を離れずに居たが、乗船拒否をされたと知って浜辺に泳ぎ戻り、遠ざかる沖の船を見て三度ほどイナナキをした。其の後に浜辺で身の振り方を考えているところを源氏方の河越小太郎重房が捕えて後白河法皇に献上した。実は此の馬は法皇の秘蔵する名馬であり、法皇殿の第一の厩舎に置かれていたのだが平宗盛が内大臣に任官した際に御祝として拝領したのである。宗盛は其れを知盛に預けた。

知盛は、預かり馬ながら大切にして中国の有名な神に馬の無事を祈願した。そのお蔭で馬は丈夫で好運になり合戦で主人の命を救ったのである。（馬の）出身地は信州井の上なので「井上黒」と名付けられていたのだが、河越小太郎が捕らえたので「河越黒」と呼ばれるようになった。

その河越黒に助けられた平知盛は、宗盛の前に行って「武蔵守（知明）を死なせてしまいました。さらに監物太郎も助けられませんでした。頼りにしていた二人を失い、今は心細くてなりません。息子（知明）が私を助けようと敵に組むのを見ながら、それを助けることが出来ず（自分だけが）この様に逃れて来たのです。もし、これが他の者の事であったならば私は其れを責めたでしょう。我が身の事で有れば、矢張り命は惜しいものと今こそ思い知らされております。他の者に対して恥ずかしい限りです…」と、着衣の袖を顔に押し当てて、さめざめと泣いたのである。

其れを聞いた平宗盛（平家の総帥・内大臣）は「武蔵守が父（知盛）の身代わりとなったのは類い稀な（たぐいまれな＝滅多に無い）ことである。武芸の腕も確かで、心は穏やかな良い大将軍で有られたが（其の勇士を失って）誠に残念である。年齢は清宗（宗盛の子）と同じく、今年で十六になったばかりであったな…」と、自分の子（右衛門督・清宗）のほうを顧みて涙ぐんだ。控えていた平家の武士たちは全員が涙を流していた。

落足（おちあし）のこと

内容は合戦に負けて個々に逃亡する平家の者たちの話であるが題名が具体的過ぎていやらしい。小松殿こと、早逝した平重盛の末子・備中守師盛（びっちゅうのかみもろもり）は、主従七人で小船に乗り沖の本船を目指していたところ、知盛の家臣・清衛門公長（「清」は苗字？）が浜辺に駆け寄って来て「備中守殿の御船とお見受けします。どうか乗せてください！」と頼んだ。

浜辺から離れてはいたが、止むを得ず船を戻して乗せることにしたのだが、身体の大きい公長が

完全武装のままで馬上から小船に飛び乗ろうとしたのから弾みで船は一回転した。全員が海中で浮き沈みしているところに、畠山重忠の家臣である本田次郎ら十四、五騎の源氏軍が駆け付けて来て、溺れている者たちを熊手に引っ掛けて救い上げ、親切に首を斬ってくれた。師盛は未だ十四歳。

巻第三などに登場した平教盛の長男は通盛（みちもり）と言った。従三位の位階を持ち越前守に任官していた。平家・山の手軍の大将軍を命じられており、赤地錦織の直垂に唐風の高価な鎧を身に着けて黄河原毛と言う頭部と尾の毛が黒く少し黄色味を帯びた白馬に銀飾りをした白い鞍を置いて乗っていた。幾ら立派な身なりをしていても合戦には慣れていないから、顔面に矢傷を受けて敵に隔てられ、弟の能登守教経と離れてしまった。

死を覚悟して静かな場所で自害しようと東の方角に落ちて行く途中で、源氏軍の近江佐々木一族、木村三郎成綱と武蔵国の住人・玉井四郎資景ら七騎に囲まれて討死をした。通盛には一人の武士が付いていたのだが、肝心な最後のときには応援に来ないで行方不明になっていた。

一の谷平家軍の基地（本陣）東西の木戸口は、源氏・平家両軍の勢力が死力を尽くして激戦を展開していたので、時間が経つに従って両陣営の死傷者は多くなった。矢倉と言う展望（見張）台の前とか障害物の前などには倒れた人馬が山のように重なっていた。一の谷に在った笹の原は緑色をしていたのに死傷者の血で赤く染まり、生田の森や山際の断崖、或いは海岸では、射られたか斬られたかは分からないが両軍に多くの死者が出た。

結果的に勝利をしたのは源氏であるから、証拠として討取った敵（平家方の武士）の首を展示したものが二千余に及び、其の中には平家一族の主要な人物である越前三位通盛、蔵人大夫成盛（両名は清盛の甥）、薩摩守忠度（清盛の末弟）、武蔵守知明（清盛の孫）、備中守師盛（平重盛の子）、尾張守清定（清盛の子）、淡路守清房（清盛の子）、皇后宮亮経正（清盛の甥）、若狭守経俊（経正の弟）、大夫敦盛（経俊の弟）らが含まれていた。

後白河法皇に騙されたかどうか確かめようが無いが、何と言っても合戦をして負けてしまったのであるから、安徳天皇を始めとして生き延びた平家の人々は船に乗って一の谷を離れた。正直なところ何処に行くと言う当てはないのであるから、誠に心細い限りである。後は潮流に翻弄され風に吹かれて紀州路に向かう船あり、芦屋の沖に流される船あり、須磨明石の沿岸づたいに停泊地も決められない漂流を続けていた。中には激戦を展開した一の谷付近の沖に停滞している船もあった。

この様に波まかせ、風まかせの状態でそれぞれの船が漂流しているので、船同士の連絡もつかず、身内同士の生死の確認も出来ない有り様である。

かつて諸国を領地として従えること十四か国、軍勢を保持すること十万余騎と言われた平家が、一旦は都を離れたけれども首都奪回の目的で京都に近づき、あと一日で都入りが出来るところまで近づいた。今度こそ！と頼もしく思われたのに、遥々と攻めて来た源氏軍の関東勢に一の谷を攻め落とされてしまった。その惨めな結果には、平家に関わる誰もが「暗澹（あんたん）とした思い＝将来の希望が全く無い絶望感」にかられている。

次は巻第九の最後になる「小宰相身投」である。絶望感から身投げと平家には気の毒な話が続く。

小宰相身投（こざいしょうみなげ）のこと

原本には此の章段が欠けていたものを他書から入れた、と付記して或る。冷たい言い方をすれば平家物語の筋から見て、無くても良い部分なのかも知れない。小宰相とは前章段で一の谷合戦の平家方戦没者筆頭に挙げられた越前三位通盛（清盛の甥）の未亡人である。表題に結末が挙げられているから説明する迄も無いが、旦那に戦死された未亡人が、世を儚（はかな）んで身投げをする。

越前三位通盛の家臣に宮田又は郡田の時員と言う瀧口が居た。瀧口は御所の清涼殿東北部を警護する武士である。就職先を欠勤して平家軍に加わり一の谷合戦に参加していたのである。平家軍船に逃れた時員は、別な船に居た平通盛の北の方を訪ねて次のように最後の様子を伝えた。

「通盛殿は一の谷海岸部に流入する湊川の下流で源氏勢七騎に取り籠められ討死をされました。直接に手を下したのは近江の佐々木一族・木村三郎成綱と武蔵国の住人・玉の井四郎資景と名乗る武士です。私も其の場に居り、死出のお供をするところですが、かねてから“通盛の最後の時に、時員は命を捨ててはならない。何としても生き長らえて貴女様の行方を尋ね、通盛の事をお知らせせよ“と仰せを受けておりました。その為に生きる甲斐の無い命を長らえて逃れて参りました！」

是を聞いた小宰相は何の返事も無く奥に籠って衣服を被り寝込んでしまった。既に通盛が討たれたと聞いてはいたのだが…万が一にも間違いであって通盛が生還することを期待していたのに…。

二、三日は少しの間だけ出かけた人を待つような心地で過ぎ、四、五日を過ぎれば、その希望も儚く思われて来る。それなのに最初の日に時員からダメ押しをされたので、もしやの頼みが早々と断ち切られたことになる。小宰相に一人だけ付け

られていた女房も主人と共に寝込んでしまった。此の女房は乳母である。

小宰相が通盛の死を確認させられたのは一の谷の合戦が行われた二月七日の夕方であるが、それから二月十三日の夜まで、小宰相は寝床から起き上がることが出来ずに居り、船は八島に向かっていた。夜も更けて船中が静かになった頃に、小宰相は乳母の女房を呼んで次のように言った。

「此の度の戦さで三位殿（通盛）が討たれた、と聞かされたけれども、それがどうしても信じられずに居たのです。それが昨日、今日になって、矢張り本当なのだと思うようになりました。誰もが（通盛公は）湊川とかの下流で討たれた、とは言っても、生死を確かめた者は一人も居ません。

思えば出陣の前に一の谷の仮屋で僅かな時間に別れを惜しんだ時に（巻第九「老馬」参照）―〝今度の合戦では討たれるかもしれない〟と心細げに言われて、私が万一のときに貴女はどうされるかと、何度も問われたけれども、戦さは常のことなので（通盛公が）討死されるなどと少しも考えずに碌な返事もしなかったことが悔やまれてなりません。あの時に、最後の別れだと気付いていれば来世の約束をしたものをと、思うさえ悲しいことです。あの時に自分の体調が思わしく無く、それが懐妊の兆候だと分かったので、それを隠していたのですが、思い切って打ち明けたところ、非常に喜ばれて〝通盛は既に三十歳になるのに子供が無かった…どうか男子であるようにと（もし討死しても）忘れ形見に残しておくことが出来るが、さて、（胎児は）何カ月になるのか、（小宰相の）体調は大丈夫か、波の上（船上）の暮らしでは出産の時に不都合は無いか〟などと案じてくれていましたが、それも虚しいことになりました。私は経験が無いので分かりませんが、出産は大事で、十のうち九例は命が危ないとか、そうであれば、恥ずかしい思いをして死ぬのも嫌ですし、通盛公が亡くなられた今、生まれて来る通盛公の忘れ形見を育てるのも残された者の務めかも知れませんが、遺児を見る度に亡き人を思いだすのも辛いことです。それやこれやを考えると、今は亡き通盛公のことを起きては思い寝ては夢に見て暮らすよりは、自分も海の底に沈もうと（あの世で共に暮らそうと）決心をしたのです。（乳母が）一人だけ残って、（私の死を）嘆くことは心苦しく思いますが私の衣装が有るので、それを何れかの僧侶に布施として渡し、亡き通盛殿の菩提を弔い併せて私の後生を頼んで下さい。また遺書を書いたので、其れを都の親族に届けてください…」

細々と述べたので、乳母の女房は驚き、涙を流して止めた。「私が未だ幼い子を都に残し、老いた親に任せて貴女に付き従った気持ちを、どの様に思われますか！その上、一の谷の戦さで亡くなられた方々の北の方（夫人）の思いも疎かには出来ません。通盛殿を失った小宰相殿と同じ悲しみを負う方々が大勢、居るのです。どうか御自分だけのことと思い詰めずに、通盛殿の忘れ形見を生み育て参らせてから、何処で有ろうと仏門に入られ亡きお方の菩提を弔って下さい。人が来世は一所と願っていても生まれ変った後は六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の何れに行くか、誰と行き会うかは不定なのですから、身投げをして死んでも思い通りには行かないものなのです。また都に残された方々のことも誰に世話をさせようと仰せなのですか！恨めしいことを仰せになる…」と泣き伏してしまった。

小宰相は、自分の思いを悪く受け取られてしまったものと後悔をしたが「それは…私の気持ちになって推察して欲しい…身投げをしようなどと言う事は世間でも良く言うことで、私がもし本当に其の気持ちであれば、誰にも知らせずに飛び込みます…もう夜も更けたから今夜は休みましょう」と言った。しかし乳母は小宰相がこの数日は満足に食事もしていないので本当に死ぬ気で居ると分かっていたから「どうしても（死を）決心されたのであれば、私も千尋（ちひろ）の底（千八百メートル＝深海）までお伴を致しますから…北の方に先立たれて片時も生き長らえようとは思いません」と言いながら小宰相の側に寄って居た。

近くに居られては海にも飛び込めない。小宰相は寝る振りをした。それを見た乳母は少し気が休まったのか、つい居眠りをしてしまった。その隙に小宰相は起き出して船の舷側に寄り西方浄土に向かい手を合わせたのだが、海の上ではどちらが西か分からない。月が傾く方向に見える山地を浄土の方向と勝手に決めて一人静かに座った。

折しも沖の白洲に千鳥が鳴き、海峡を漕ぎ渡る為に漕ぐ梶の音が哀れを催す中で小宰相は忍び声に念仏を百度唱えてから「南無西方極楽世界教主弥陀如来、本願（願主を極楽に迎える願い）あやまたず浄土へ導き給いつつ、あかで別れし妹背（亡き平通盛公）の許へ…必ず一つの蓮（はちす＝台座、一緒の意味）に迎え給へ…」と祈りながら泣く泣くあの世（冥界）に向かって嘆いた後に「南無…」と唱える声と共に海に沈んだのである。

合戦で敗れた一の谷から逃れて讃岐の屋島に向かう船中での深夜の出来事であった為に、小宰相の飛び込み自殺は誰も知らなかった。しかし数隻の船団で航行している僚船の当直士官が是を目撃していて船を近づけ「…その船から美人の女房が

海に飛び込まれましたぞ！」と叫んで知らせた。
「…美人の…」はサービスであろうけれども原本には記録されている。その声で真っ先に起きた小宰相の乳母が周りを見たが主は居らず、当然に大騒ぎとなり、男たちが船の周りを捜索したが春の霞で良く見え無い。何人かが海中に飛び込んで探した結果、小宰相を引き上げたけれども蘇生をする筈もなかった。小宰相は二枚重ねの上着に白い袴（はかま）を着けていたが、当然のことながら髪にも袴にも海水が染み込んでいた。
乳母は、其の遺体の手を取り、顔を押し当てて「是ほどまでに思い詰めておられたのであれば、なぜ、私も千尋の底まで連れて行って下さらなかったのですか…それにしても、どうかもう一度、お言葉を聞かせてください…」と、身悶えして泣き焦がれたけれども、既に息が絶えていたから蘇生は難しく返事は出来ない。
そのうちに春の夜の月も雲に隠れ、霞んでいた空も明るくなった。名残は尽きないが其の侭にも置けないので、平通盛が着用していた予備の鎧を小宰相の遺体に着せて（浮いて来ないように）海に葬った。その際に乳母も海に飛び込もうとしたのだが、これを周りの人々がようやくに止めた。
乳母は、突きつめた思いで自ら髪を切り、通盛の弟で僧籍に入っていた中納言律師仲快に師事して亡き主の後世を弔った。昔から夫に先立たれる例は多いが、出家して世を捨てる者は稀である。
尚更に、此の乳母の様に主人の後を追って身を投げようとする者は極めて珍しい。忠臣は二君に仕えず、貞女は二夫にまみえず、とは、この様な事を言うのであろうか。
平通盛の後を追って入水した小宰相は「頭の刑部卿（とうのぎょうぶきょう＝天皇侍従の長を兼ねた現代の法務大臣）」藤原教方（のりかた）の娘で、鳥羽天皇の第二皇女・上西門院こと統子内親王に仕えていた。その頃から宮中一の美人と称された女性である。十六歳の頃に、女院のお供で京都左京区の法勝寺へ出かけた際に、当時は中宮亮（ちゅうぐうのすけ＝宮内庁の次官級）であった平通盛に見染められた。
通盛は歌を送ったり恋文を届けたり積極的な運動をしたのだが無視されていた。それが三年ほど続いて、通盛は最後通告？の手紙を届けさせた。其の日、手紙を預かった者は、取次をしてくれる者にも会えず、虚しく帰ろうとしたところに牛車に乗った小宰相を見掛けたので、預かった手紙を車の中に密（ひそ）かに投げ込んで来た。
手紙を見つけた小宰相は、供の者に聞いたが誰も知らない。車内に置けず、何処かに捨てるにも良い場所が無く取り敢えず袴の腰に差して女院の許に出勤した。それを忘れて勤務中に都合良く？女院の御前に落としてしまった。拾われた女院が女官たちを集めて「珍しいものを手に入れたけれども誰に宛てたものであろうか？」と尋ねられたが女官たちは「神仏にかけて知りません…」と答えるばかりである。
小宰相も顔を赤らめていたが女院は通盛が出した手紙と知っておられたので、其れを開けてみると手紙に香が焚きしめてあって筆使いも上手である。文には「…貴方の意思が強くて、軽薄に靡（なび）いてくれないのも今は却って嬉しい…など細々と記して有り手紙の末尾に「我が恋は細谷河（ほそたにがわ）のまろ（丸）木橋踏み替えされて（文返されて）濡るる袖かな」とあった。
女院は「是は（誘っても）逢ってくれないことを恨む手紙ですよ。人の心は余りに強くても其れが仇となることも有ります。少し前の時代に、小野の小町と言って世に優れた美貌の上に愛情も類い稀な女性が居ました。（小町を）見る人も聞く人も心底から魅了されたのですが、情が強い（心を許さない）とする噂が広まって誰も近づかないようになり、その中に暮らしにも困り、荒れ果てた家に野草を詰んで涙ながらに淋しく過ごすようになってしまいました…その様にならないように、良き人には、良き返事をしておきなさい…」と忠告して下さり、自ら硯箱を取り寄せて小宰相に代わり「…ただ頼め細谷河のまろ木橋踏み替えしては落ちざらめやは…」と返歌を書いて下さった。
良い返事を受け取った通盛の心中は燃え上がる富士の煙の如く、嬉し涙は清見が関（清水市付近の古関）に打ち寄せる波（古歌に拠る）のようであった。「みめ（容姿）は幸運の華」といわれる。平通盛と小宰相とはお互いに愛情深く、強い絆で結ばれていた。それ故に、小宰相は西海の旅空に船の中から波間へと亡き通盛を恋い慕って身を投げたのであり、二人は同じ冥土へ赴いた。
門脇中納言こと平教盛は、嫡男の通盛と末子の業盛（なりもり）にも先立たれてしまった。残る男子は能登守教経と僧になった忠快だけである。亡き通盛の忘れ形見である胎児と共に小宰相が死んでしまったことは、教盛を一層、心細くした。

（巻第九・終）

編集事務局　〒315-0001
石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063
（白井啓治方）
http://www.furusato-kaze.com/

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。○会費は月額 2,000 円。（会報印刷等の諸経費）※入会に関するお問い合わせは右記会員まで。

白井　啓治　0299-24-2063　打田　昇三 0299-22-4400
兼平智恵子 0299-26-7178　伊東　弓子 0299-26-1659

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター、他で販売しております。
お問い合わせは編集事務局へ。

ふるさと風の文庫の主な作品

- 打田　昇三…打田昇三全集（全 6 巻）、歴史の嘘、私本平家物語、私本将門記他
- 兼平智恵子…歴史のさといしおか散歩、ふるさと風のことば他
- 伊東　弓子…風の景他
- 小林　幸枝…風に舞う他
- 菅原　茂美…遥かなる旅路（１、２）
- 木村　進　…地域に埋もれた歴史シリーズ（全 24 巻）石岡地方のふるさと昔話、茨城のちょっと面白い昔話他
- 白井　啓治…皇帝ペンギンの首飾り、霞ケ浦の紅い鯨、朗読/ふるさと物語…他

ふるさと風劇団「ことば座」団員＆朗読教室生募集

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。ことば座では、
スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。
ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく（はげしく）心を演じることを言います。何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。月１回コース（受講料:￥6,000 円）　2回コース（受講料:￥9,000 円）

ふるさと風の会編集事務局　〒315 - 0001 茨城県石岡市石岡 13979 - 2　TEL 080-3125-1307